

世界お伽文庫

落合浪雄編

田口掬汀序

特13-779



1200500780144

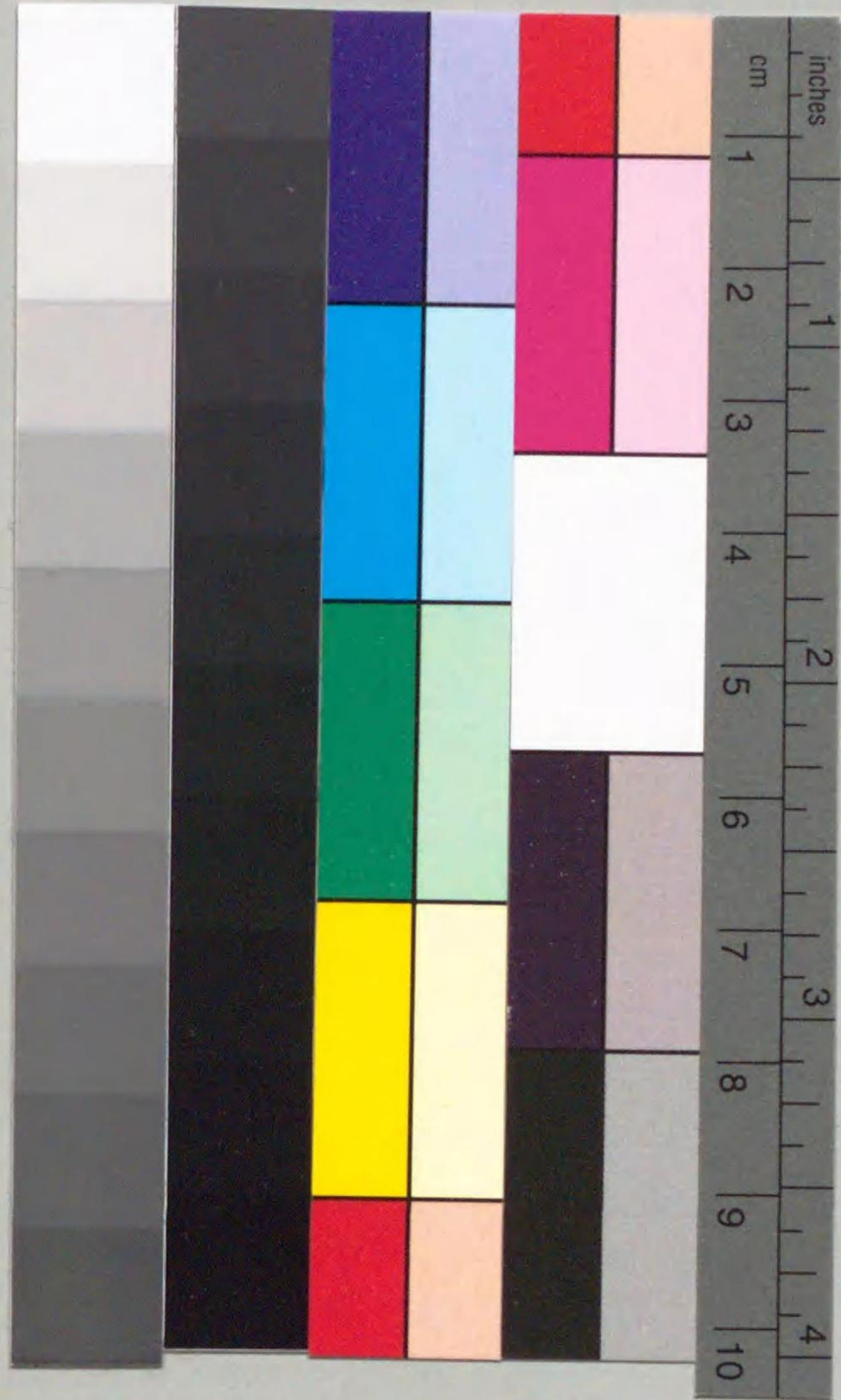
特13

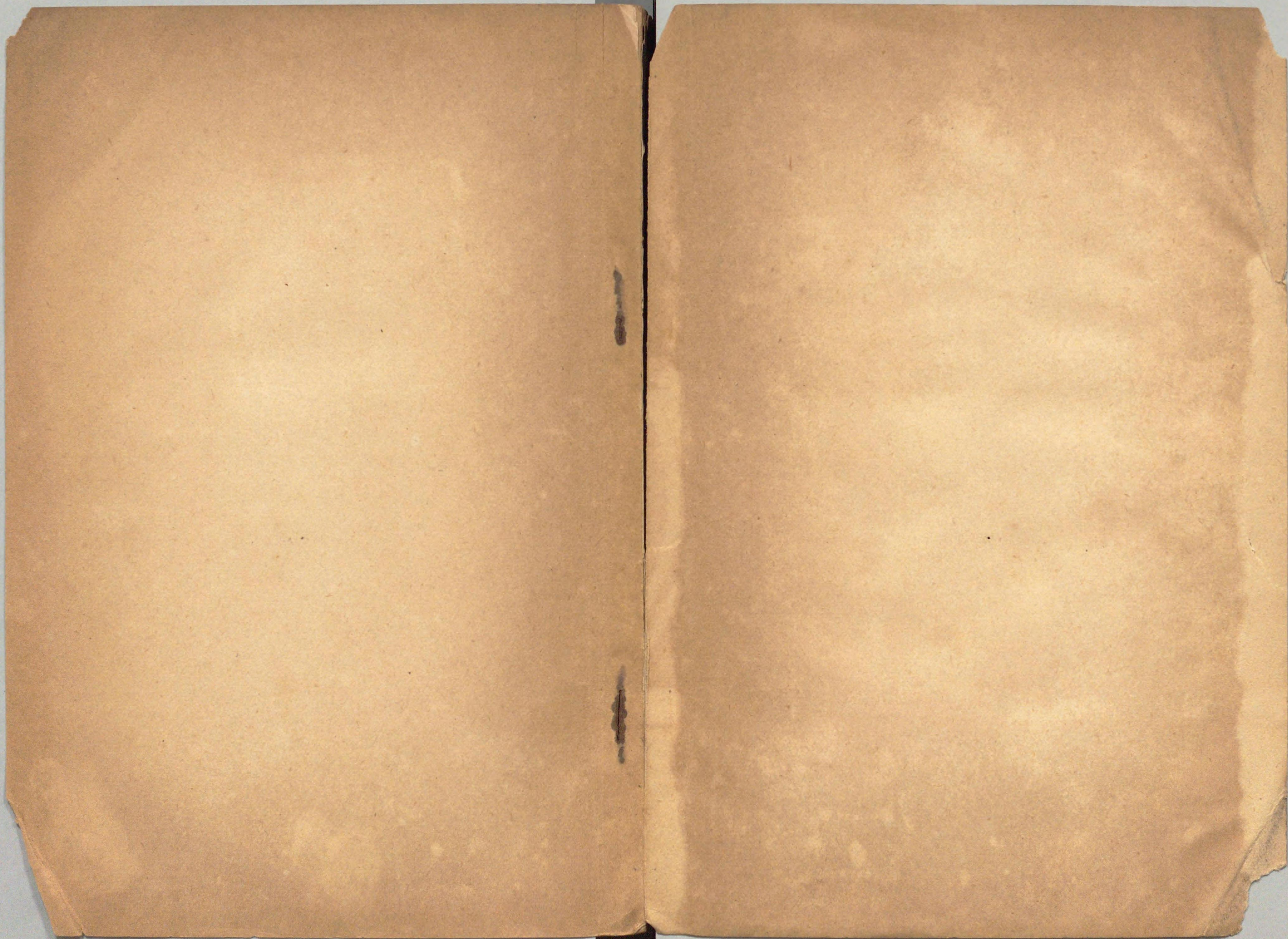
779



特13

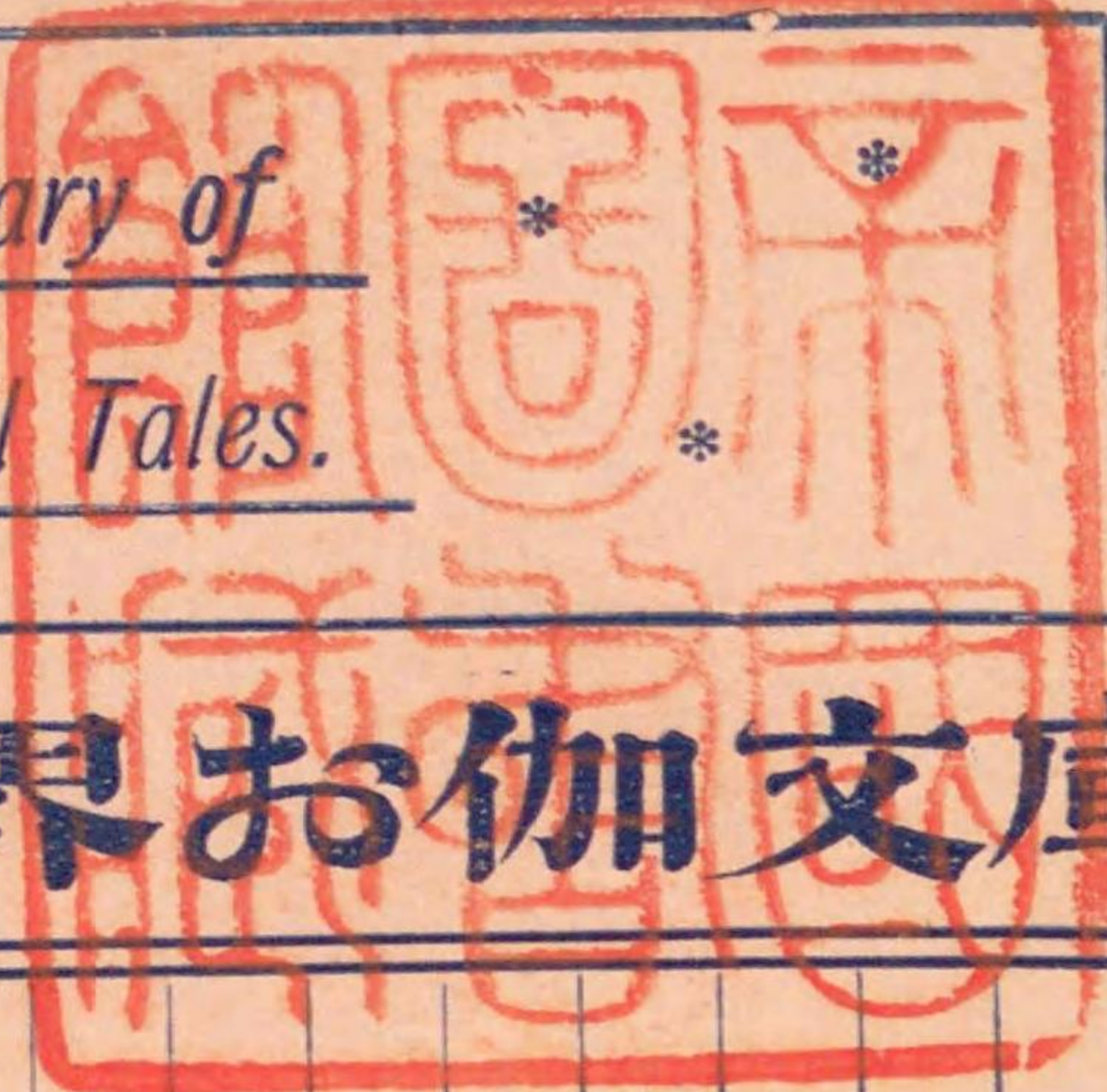
779





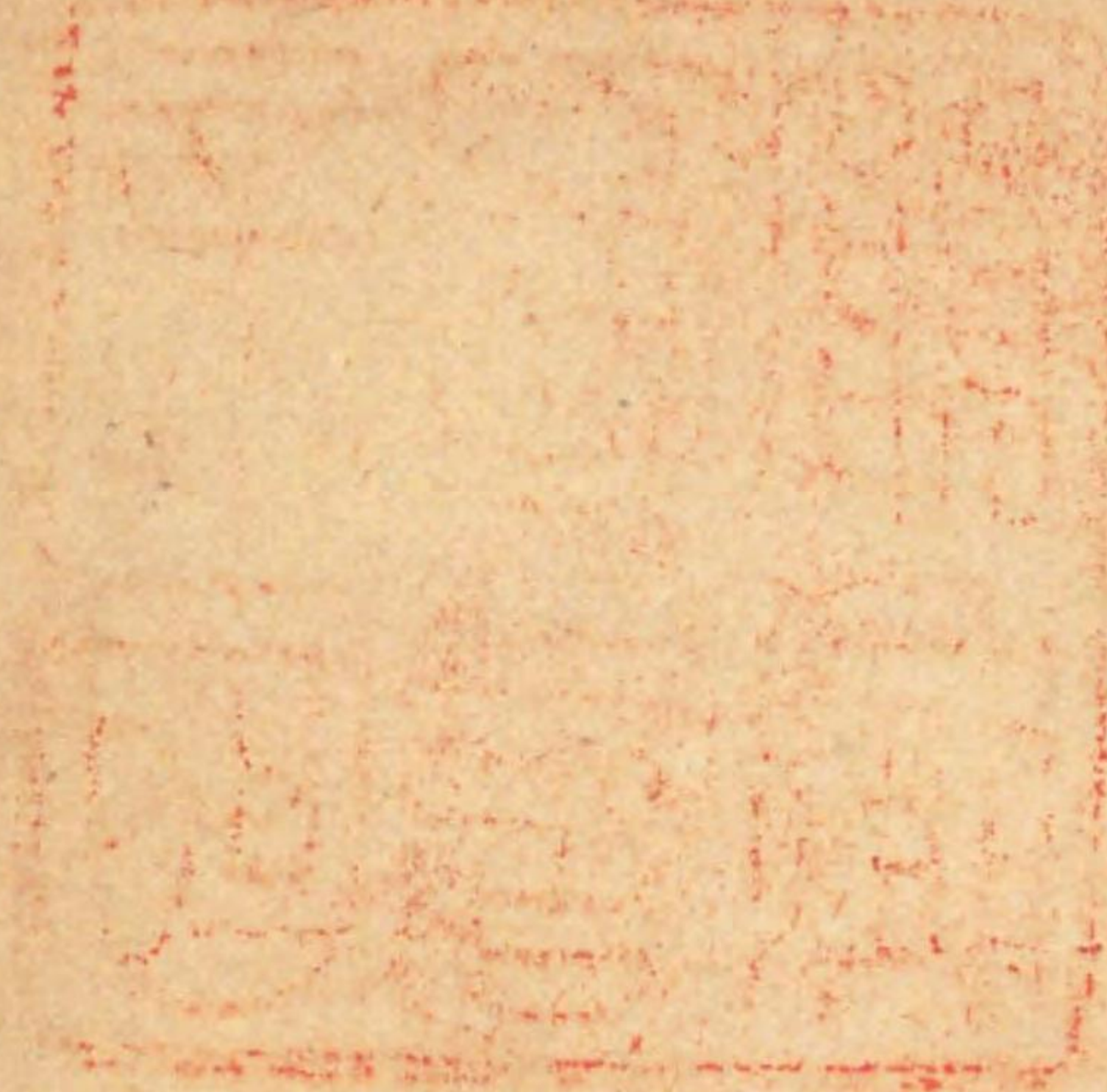
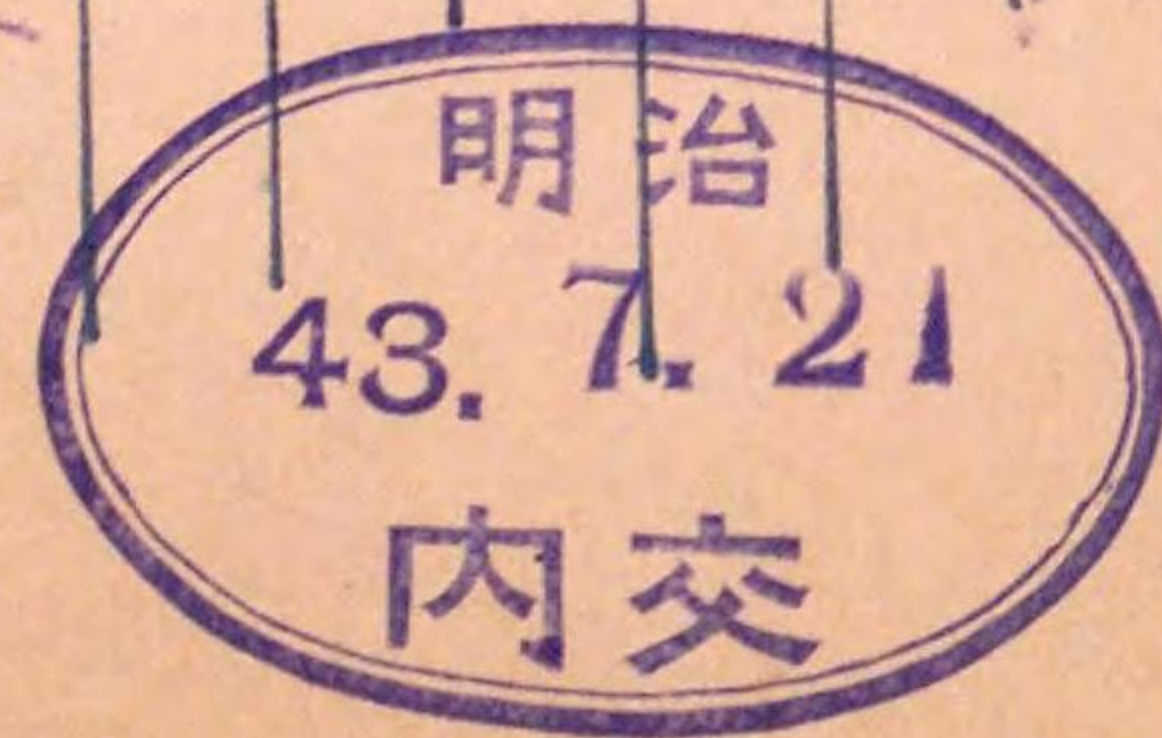
Library of

Fa il Tales.



世界お伽文庫

東京朝野書店發行





子供こどもの大人おとな振ふるるのは厭いやなものだ。子供こどもは矢張やっはり子供こども
 染しみてゐるのが可愛かわいい、更に可愛かわいのは子供こども染しみた大おとな
 人ひとである。大人おとなの子供こどもたらんさして僕ぼくはお伽お伽噺ばなしを讀よ
 む、讀よんで夢ゆめのやうな事ことを面白おもしろがる。僕ぼくなんぞ別べつ物ものだ
 が、偉偉い人間にんげんは大概たいてい子供こども染しみた大人おとなである。
 可愛かわいがられたい、偉偉くなりたいたいと思おもふ子供こども諸しよ君くんはわ
 伽お伽噺ばなしを讀よめ。子供こども染しみた大人おとなもお伽お伽噺ばなしを續よめ。此この書しよ
 は勾まかく々けつ結構けつなもんださうな。

明治四十三年七月

田口 掬汀



左様なら男に化けたお嬢さん

次 目

第一	西洋桃太郎	幸ひに女神の助を得たる伯爵の令嬢山の如き麵麴も食ひ盡し川の水も一口に呑む勇士數人を道連れとし大蛇を退治し隣國を征服する面白き話
第二	七人兄弟	親に棄てられし母指七郎六人の兄を救けて悪鬼の手に陥り苦心慘憺一足で七里歩ける靴を奪取り鬼は斬殺し戦争には斥候となり大功をなす冒険談
第三	小猫物語	人間と話しの出來る猫が主人を救けて奇計百出遂に靴一足と袋一枚の元手にて主人を大名となし自分も男爵となり總理大臣となる珍らしい話
第四	不思議の帽子	是を冠れば何處へでも思ふ處へ直ぐ行かれるといふ帽子と手を突込みさへすれば何時で金貨が十宛出るともいふ不思議の財布の物語
第五	金髮美人	恩を施せば必ず報はある者と鯉と烏とを救けた斗りに山の如き巨人に打勝大蛇が住む洞穴の中から美の水を汲出して忠義を盡す勇士の物語

特/3
779

(一) 西 洋 桃 太郎

世界お伽文庫 落合浪雄 譯

西洋桃太郎

第一

昔或處むかしあるところに有穂王ありほおうと云ふ王様おうさまがありました、其方そのかたは御心おこころは優やさしくを
して強つよい方かたでありました、隣となりの國くにには是これよりも一層いちそう強つよい股葉王またはおうと云
ふのがありました、お互たがひに散々さんさん戦たたかひました處ところ、股葉王またはおうが十分じゅうぶんの勝利しょうり
を得えて有穂王ありほおうの寶物ほうぶつを殘のこらず分捕ぶんごりして仕舞しまひ、そして王妃おきさきの歡迎くわんげい
を受けて威勢いせいよく凱旋がいせんしました(一)

此時このときに有穂王ありほおうは散々さんさんな目めに逢あつたので大層たいそう殘念ざんねんがり、是非ぜひ何なんとか
工風くふうして分捕ぶんごられたものを取り換かへさなければならぬと考かんがへまし

た、夫で僅に残つた兵隊を集め、足らないのを補ふ爲めに、御布令を出しました、其お布令には自分の王國に住んで居る男は誰でも王の處へ援兵に來なければならず、又夫が出來なければ澤山のお金を拂へど云ふ事でした、(二)

此國の境に年は八十になつた伯爵が住まつて居ました、以前には非常な大金持であつたのですが、色々不仕合が續いたので今では、僅のお金をばつゝ減らしながら娘三人と呑氣な隱居暮しを仕て居るのであります、處がお布令が廻はつて來たので老伯爵は如何したら好からうと、三人の姫を集めて相談をしました、『何故と云ふと私は王様の兵隊になるには餘り年寄り過てるし、左様かと云つてお金を納めれば一度に貧乏になつて仕舞ふから』と、(三)

『左様御心配なさいますな、父上、考へたら何か工風がありましたよ』

うと三人の姫達は云ました、すると妾は若くて丈夫で、骨折業にも馴れて居ますから、騎兵の服装をして王様の處へ往つて見ましようか』と姉姫の言葉を聞いて老人は優しく其脊を撫で、熱心らしい様子を見て行く事を許しました、早速色々出来る丈の仕度を整へて姉姫は出立しました、(四)

まだ遠くも行かない所で、一人の年老つた女羊飼が、溝へ落ちた羊を引上げ様として涙を流して骨折つてるのを見ました、『何を仕て居るのだ、お婆さん』と騎兵になつたお姫様が云ひますと、『はい、此死に懸つた羊を助け様と思つてますが、私が力がないので引上げられませんか』と婆さんは答へました、『夫は眞實にお氣の毒だね』と云つた限りて騎兵は馬を飛ばして進んで行きますのを、お婆さんは見送りながら『左様なら此お轉婆お嬢さん』と云ひました、騎兵になつたお姫

様は是を聞いて、何よりも第一に自分が見現はされたので驚きました、此様な事なら家へ歸つた方が好い、一目で見られて最早、男でない事を皆に云ひ振らすと同じだから』とお姫様は云ひました、(五)
直ぐとお姫様は歸つて此話を老伯爵や妹に話しました、すると二番目のお姫様は姉さんの代りに妾が行くと屹度其様事はなかつたでしよう、何故つて云ふと妾は姉さんよりは脊も高いし、丈夫ですし、妾しなら如何な賭をしていも屹度やつて見せますよ』と云ひました、老伯爵は二番目の姫の望みで姉姫と同じに行く事を御許しになりました、したから、お姫様は急いで服を用意し馬を用意して姉姫の行かれたと同じ道を出發しました、羊飼の婆さんは前と同じ處に居つて矢張り死に掛つて居る羊を溝から引揚げようと仕て居ました、お姫様の騎兵が如何したのかと聞きますと、お婆さんは『私は不仕合です、澤

山の羊が斯うして皆死んで仕舞ひました、何卒か救けて下さ』と云ひましたが、お姫様の騎兵は『屹度、おきに誰か來て呉れるよ』と云つて馬を返へして行かうとすると、お婆さんは『左様なら、男に化けたお嬢さん』と叫びました、二番目のお嬢様は驚いて馬を止め『此様旨も同じのお婆さんにさへ易々と見現はされる様では、是から先へ行くのは人に笑はれに行く様なものだ』と獨語を言ひながら、姉さんの通りに落膽して家へ歸りました、(六)
二番目のお姫様が、此話をした時に心立が優しいので老伯爵から大層可愛かられて居る夫のお姫様が姉さん達を同じ様に、自分もやつて見まうと云ひ出しまして、老伯爵からは止めると云はれ漸々に押問答の末に、やつと承諾を得ました、處が老伯爵は二人の姉姫に騎兵の仕度をさせる爲め澤山のお金を費したので、馬車の馬一匹と

醜い衣物しか買へませんでした、が是が出来ると妹姫は直様父上や姉様達に分れを告げて出發しました、(七)
同じ野原を通つて行きますと、羊飼の婆さんは又其處へ現はれて前と同じ事をして居ます、「お婆さん、何をして居るのです手傳つて上げましょうか」と此優しい騎兵が尋ねながら進もうと仕ますと、羊が水の中で苦む音が聞えたので、すぐと馬から飛で降りて羊を引揚げてやりました、すると羊飼の婆さんは妹姫の方に向ひまして、「何處のお方か知りませんが、何とも御禮の申様もありません難有う御座いました、實は私は神で、貴方の事も好うく知つてます、是からお友達になりましょう」と云ふかと思ふと棒で地面を叩きました、すると美事な馬具を付けた駿馬がひよつこりと現はれて妹姫の前へ乗れと云はんばかりに立ちました、(八)

『此馬の毛色の美しいなどは何でもありません、何故と云ふと此馬は極僅しか食事をしない、夫も一週間に唯つた一度夫よりも尙不思議なのは昔の事も、今の事も、先の事までもチャンと知つてる事です、若貴女が、如何して好いか分らない時には此馬にお尋ねなさい、多分一番好い友達だと御考なさる様になりましょうと神様が云ひました、其上に若も貴女が衣服でもお金でも寶石類でも要る時には自分の足で地面に印を付けると、其處からモロツコ革の革靴に這入つて出て來ますと話を續け又「あ、貴女に名を付けて上げましょう、是からは私が守もつて必ず幸運に向ひますから、幸夫と云ふのが何よりも一番好いでしよう」と云ひました、(九)
幸夫は此神様の御力を確め様と思つて足で地面へ印を付けました、すると實に美事な衣服が出て來ましたので、早速夫を着情深い此友

達に乗られて、そして王様の宮城に向つて進んで行きました(十)
 初めての日の晩に幸夫は父上にはお金を少し、姉さん達には寶石
 を贈りたいと思ひましたので、宿屋の部屋を閉め切つて、聲高く叫
 びながら足で床へ印を付けました、一つの革靴が出て來ましたが、錠
 が卸りて居て鍵がありません(十一)

幸夫は是には困り切つて如何して好いか分らなかつたのですが、
 斯う云ふ時にこそ『友』馬に斯う名を付けたのです(十二)にさへ尋ねれば屹度
 好い智恵を貸して呉れると思ひ付きまして、直ぐと廐へ參りました、
 『友よ、何處にお金や寶石を入れた、革靴の鍵があるのか』と尋ねまし
 たら、友は私の耳の中です』と答へました、早速其の中を調べて見る
 と緑色のリボンで飾りのしてある鍵がありました、幸夫は大喜びで
 革靴を開けて中の品物を家へ送りました(十二)

次の朝は又此親切な友に乗つて旅を續けて行きました、まだ幾干
 も來ない内に大きい森がありました、其中に一人の男が木を切り倒
 して居るのに出逢ひました、友は立止つて仕舞ひ主人の幸夫に此男
 は牛兵衛と云つて神様が如何な重い物でも脊負へる様に力を與へて
 下さつたのだから、此男を御雇ひなさいと云ひましたので、幸夫は
 其男の傍へ寄つて話して見ますと、牛兵衛は嬉んで幸夫の家來にな
 りました(十三)

又少し行きますと、又今度は兩足を縛つて居る一人の男に逢ひま
 した、友は又立止り御主人、此男を御備ひなさらなければ如何して
 も出來ない事があります、此男は鹿より十層倍早く走れる足の力を
 神様から授かつて居るのです、餘り早いので捕へ様とする獸より先
 へ行き過ぎて仕舞ふので、態ど足を縛ばつて居るのです』と云ひまし

たので幸夫は早速此鹿十をも家來にして仕舞ひました、(十四)
 次の日又目に縋帯をした一人の男に出逢ひますと、友は「彼れも同じです、千里の先迄も見通す事が出来すから、獸を捕りに行くには少し見えない方が好いので縋帯をして居るのです、餘り見えんと遂取り盡して翌日のが無くなるからです、彼も屹度御主人の御役に立ちますよと云つたので、幸夫は此男も譯なしに家來にして名を聞く」と鏡二と云ふのでした、(十五)

夫から又少し行くと往來に寐轉で耳を地面に押付けて居る男がありました、幸夫は是も神様に力を授けられて居るのか、是も役に立つと思ふかと友に尋ねましたら、友は「全く其通りです、此男は聞く事が誰よりも一番豪い、名は菊助と云つて、今野菜を探しに來て地の下から生えて來るかと思ひて居る處です」と云ふのを聞いて、

幸夫は菊助の力こそ外の者よりも一段優れた者だと思つて是亦家來の一人に加へました、(十六)

幸夫が家來と共に打揃つての旅の一番終りの日に幸にも又一人外の者と同じ様に最も不思議な力を神様から授けられた男に出逢ひました、友は此男は唯一息で大きい風車を動かす事が出来ると保證をしたので幸夫は「是も雇はうか」と友に聞きますと友は「御雇ひなされば屹度好い事をしたと御思ひになる事がありましよう、」と答へたので、此風車も直様家來のうちへ加へられました、(十七)

やがて一同が王様のお城のある町が見へる處までやつて來ました時に、二人並で地面へ座つてる男を見ました、「あゝ、誰だつて貴君程幸な方はありますまい、御主人、茲に居る二人も神様から授かりの力を持つてます、一分でも遅かつたら二人は得られなかつたに違

ありません、此處の方へ近いのは山九郎と云つて山の様に積み上げた
た麵麩を一口に喰べて仕舞ふと云ふ男で、最一人は息を吐かずに川
の水を飲み干して仕舞ふので、名は河六と云ひます、此二人を家來
になされば、貴君の御仕合はせは必ず上々吉です」と友の云ふので幸
夫は猶豫なく雇ひました、而して牛兵衛、鹿十、鏡二、菊助、風平、
山九郎、河六の六人を供にお城近くへ進み寄りました、(十六)

第二

其時に幸夫は足を揚げて地面に印をすると、忽に革鞆が現はれ中
には一抔立派な着物か七人の着る丈這入つて居りました、早速に夫
を着せ堂々と威儀を正して王様のお城へ乗込みますと、大層町噺に
出迎へられ、王様は御用中であるから、先づ緩々休息の上拜調した

がよからうと、立派な部屋に案内されました、(一)
翌日王様からお召がありましたので、直様御前へ出ました、王様
は妹の女王、一度隣國の王子に嫁入りましたが今は獨身で居られ、
悲しい身の上を慰める爲に兄なる王様と一所に御出になる女王にも
御會せなさいました、女王は幸夫を今迄に見た事もない立派な王子
たと思つたので大層親切に待遇れます、王様は先づ幸夫に名前や親
類の事をお尋になり、以前王様の爲めに忠義を盡した伯爵の子であ
るとお聞きになり、幸夫の位を上げせ御褒め言葉を下さいました、(二)
隣國の王様を攻める仕度をして居る間、幸夫と名乗つた末のお姫
様は王様のお城に居りました、そして度々王様とも御目に懸るので、
何時か王様が心の極く優しい方である事を知つて、戦争に勇氣を落
とす様な心配さへなければ、腰元にでもなつて王様に仕へ度いと思

ひました(三)

處が、末のお姫様が斯う思つてると、王様の妹の女王の方では王様と一所に暮すよりは幸夫と一所に居たいと、幸夫が餘り奇麗な物で思ひ込んでお仕舞になりました、で色々お遣ひ物を下すつたり、優しい言葉をお懸けになつたり、如何かして自分の心が幸夫に通じる様になさいました、(四)

けれども幸夫は一向知らない風です、そして王様とはお話相手となつて大層親しい様ですが女王は何時も除け者の様になつて居ました、女王は堪らなくなつて侍婢に向つて『幸夫に妾の様な立派な女王と御婚禮を仕度いとは思はないか、聞いて見てお呉れ』と御頼みになりました(五)

處が此侍婢も亦幸夫のお嫁さんになりたいと思つて『幸夫さんには

年と云ひ身分と云ひ彼の女王よりは妾の方が好いに極まつて居ると獨語を云ながら、幸夫には女王はほんとに怒りつばい方で、妾が何時も困らされて居ます』と見當違ひの話をして、歸つて来て女王には又、幸夫には多分國の方にお嫁さんになる人がある様子ですから、夫で女王の事も何とも思はないんでしようと思ひました、(六)

女王は何にも知りませんから幾度も侍婢を幸夫の處へやりました、けれども少しも功能がないので、仕方なしに自分が逢て話をしようとお考へなさいました、そして幸夫が一人で庭の四阿の處へ来るのを侍婢に番をさせて置きました、處が間もなく幸夫が四阿へ這入るのを見て女王は此方から進み寄りしました、女王は初め好いお天氣ですの、庭の花や噴水が奇麗ですのと話して居ましたが、遂々幸夫に向つて『貴君は妾と婚禮すれば大層な出世が出来るのに何故妾の兄の

國王にお願いなさらないのです」と尋ねました、(七)

幸夫は此様大嫌いな話をされて何と云つて断はつたら好いかと一時は驚きました、幸夫が『王様のお妹様の御言葉ですから何でも随ひたいのですが是はお断りです』と云つた時には女王が驚いて赤くなつたり青くなつたり、口惜しそうにして後悔しない様になさいと云つて往つて仕舞ひました、(八)

幸夫になつて居る伯爵のお姫様は厭でく堪らなくなりました、若仲の好い王様さへ居ないなら、戦争の仕度の出来る迄何處へか往つて仕舞いたいと思ひますが左様も往きません、一日増に面白くなつて来て、仕舞には女王に逢はない様に逃げて居る様になりました、(九)

或日幸夫が王様や女王と御一所に居りました時に王様は何か心配

そうに見えましたので女王が尋ねました、すると王様は『皆も知つて居るであらうが、領地に大變が起つてる、大蛇が出て人を喰つたり澤山の羊を飲む、其上に大蛇の傍の井戸や河は其息が掛ると毒藥となり、通る處は稻も麥も皆刈れて仕舞ふ、實は是を心配してるのぢや』と仰やいました、女王は聞いて此若騎兵に復讐してやるのは此時だと思ひまして、『兄様、茲に幸夫と云ふ強い人が居るのではありませんか、此人なら屹度此大蛇を退治る事が出来て、兄様も如何に御安心が出来ましょう』と云ひました、(十)

幸夫は御受をしない譯には行きませんでした、と云ふのは女王は自分の言葉に背いた復讐に大蛇に殺され、ば好いと思てるのですから、退引ならず御受したのでした、其處で幸夫は直其座を退き、眞實の朋友である友の處へ往つて如何したらば好からうかと相談しま

した、處が友は王様の頼み通り大蛇を退治にお出なさい、行くにはあの七人の家來も連れて行かねばなりません」と答へました、(十二)

其處で幸夫は翌朝、王様や女王にお暇乞をしようと思つてお城へ出ました、王様は怖ろしい處へ行く幸夫の身の上を心配して悲しうにお暇を下さいました、女王も悲しそうに見せようと仕て、何卒無事に歸つて来る様にと云ひました、夫から幸夫は友に打跨り牛兵衛、鹿十、鏡二、菊助、風平、山九郎、河六、の六人を連れて大蛇を見付けに立出しました、六人共斯う云ふ時には實に重寶な家來です、河六は忽に川を飲み干して仕舞つて橋がなくても舟がなくても進で行くに邪魔にならぬばかりか、干上つた底から取れる魚は主人の御肴になり、鹿十は兎や鹿を手捕にし、鏡二は雉子や山鳥を射ちますし、牛兵衛は何でも一人で脊負つて行き、菊助は椎茸や野菜の

生へるのを聞いては取る事が出来るのでした、(十三)

一日の路程進だ時に怖ろしい叫び聲が聞えました、夫は慥に大蛇に捕られて喰ひ殺された人の悲鳴でありました、幸夫は友に向つて如何しようかと尋ねますと、友は「何の邊に居るか菊助に聴かして御覧なさいましと答へました、菊助は早速耳を大地に着けて聞いて居ました、やがて茲から七里ばかり離れて居る處に居りますと答へました、すると友は「夫では河六に大蛇の居る側にある川を飲盡させ、牛兵衛は其川を一杯にする丈の酒を脊負つて行き、そして兎や雉子を其河の岸へ撒き散らせと云ひました、幸夫は其近所の小屋へ這入つて容子を伺つて居りますと、一時間も経たない内に大蛇が見へる處迄出て來ました、そして兎や雉子の匂ひを嗅ぐ散在つて居るのをむしや」と喰ひ盡し、喉が乾いたので酒とは知らずに川の水を

がぶくと澤山呑みました、すると忽に酔拂つて仕舞つて大地へ倒れるなりぐつすり眠つて仕舞ひました、『さア今度は貴君の番です』と親切なる友は幸夫に云ひました、幸夫は聞くより大蛇の傍へ躍り出で唯一太刀に首を切り落して仕舞ひ、牛兵衛を呼び大蛇の死骸を脊負はせて王様のお城へ歸りました、(十三)

王様は大層お喜びでお迎へになりました、女王も、實は當が外れたのを匿して此王國の爲めに盡した手柄をお賞美になりました、が心の内ではナ―に今に復讐の手段を廻らしてやると考へて居たのでありました、(十四)

夫から間もないのに又王様は非常な御心配をお始めになりました女王は前の様に其譯をお尋ねになりました、王様は『あゝ、私は如何したら好いか隣國の王様が寶物を悉皆持つて往つたので、隣國と戦

争をする兵隊を用意する丈のお金がないのだと仰やいました、すると女王は兄様、幸夫は廿人の兵隊が掛つても退治られない大蛇を、安々と退治する程の者ですから、隣國から兄様のお寶を取り返へす事も出来ましよう、出来ないと考へなされるのは間違ひですよ』と話しました、(十五)

幸夫は聞いて居て、女王が自分を困らせる爲めに云ふのだと能く承知して、出来すまい、が是非やつて見ましようと熱心に王様に願ひました、王様は幸夫の忠義をお喜びになつてじつと手をお握りなすつた上、今度の仕事に就いて何事も起らない様にと色々の心付をして下すつて愈々出立する事になりました、(十六)

幸夫は友に相談をし、今度こそ慥に自分の身の破滅となるであらうと云ひますと、友は『御主人、決して御心配下さいませぬ、私は餘

程以前から此の事のあるのを知つて居りました、今度の仕事も大丈
夫、前と同じに首尾よく参ります、何卒六人の家來に美しい衣
服を着せ、そして立派な馬に乗らせ、其上で早速出發なさいまし、
と云ひました、(十七)

一同が隣國の王様のお城へ着きましたのは僅に五六時間の後でし
た、茲でお辨當を使ひまして一同お城へ参り王様へ御目見得を願ひ
有穂王の寶物を返へして頂きたいと願ひました、隣國の股葉王は頻
りにお笑ひなさいまして、『お前は私が彼れ程骨を折つて取つたもの
を、そう手軽に返へすと思つてるのか、若しお前が兵隊を連れて來
たのなら戦をして取り遣りをするのだけれど、左様でないんだから、
勝手な事ばかり云つて追ひ出されない様にすることが好いよ』と云ひまし
た、幸夫は決して無禮は致しませぬ、唯願ひを叶へて頂きたいと答

へました、(十八)

『夫は奇妙な事だ、まア好い、お前の願ひが馬鹿くしいから此方
からも同じ様な答をしよう、では若お前が此町の人民が朝飯に喰べ
る丈の麵麩を喰ひ盡せる人を見附けて來たなら、願ひは叶へてやる
事にしよう』と王様が仰やいました、幸夫は心の内に面白くつて堪り
ません、で早速捜して見ましようとお答をして置いて山九郎を呼び、
斯うくの話の次第だがお前に喰べられようかと尋ねますと『御心配
なさるな、御主人、御覽なさい、私の事より先方で今に悲しがりま
すから』と山九郎は平氣に答へました、(十九)

第三

此不思議極まる出來事を見物しようとして王様お妃、お姫様方と御役

人等がすつかり座に着きました時に、幸夫は山九郎を連れて進み出ました、が麵麩は積み上げて六つの山になつて居りまして、中にも高いのが空を凌ぐ有様を見ては少しく驚かすには居られませんでした、けれども山九郎を見ますと熱心に合圖を待つてる容子ですから又勇氣を出して控へて居りました、やがて合圖の鐘が鳴りますと山九郎は第一の麵麩の山へ飛び掛り忽の内に喰ひ盡しました、第二の山も同じ様に平げ、進で第六まで喰べ盡して仕舞つて、王様の前へ出て此國は大層金持の國だと考へて居りましたがクチな朝飯を頂いたと申上げるのを御許し願ひますと述べました、(二)

観て居て驚かない者はありません、そして是を見物に集まつて來ました町の人々は『是から二三日子供にやる麵麩もない』と云つて泣き始めました、(二)

けれども王様の當ての外つれた事は大變なものです、幸夫を呼び寄せて『若い騎兵、お前は私が是で有穂王の寶を返して呉れるかと思つてはいけないよ、何故と云つて、唯大食の家來があると云ふ丈ではないか、けれども若もお前の家來に川も溝も井戸の水も、其上に此町の藏にある酒もすつかり寄せて、唯つた一分で飲む者があつたら今度こそ願ひを叶へてやらう』と云ひました、(三)

幸夫は王様が不正直な事をするとは思ひましたが、此新らしい難題を躊躇せず引受けました、早速河六を呼び出し前の通り安々と王様の云ふ通りの事を仕て見せました、見物人は唯もう驚くより外はありませんでした、(四)

王様は急に眞面目な顔をして幸夫を呼び寄せ、『此二つも珍らしい、が大層もないあの寶物をやる程の價値はない、夫だから、若寶物が

慾しいなら私の娘と競走の出来るものを出すが好い』と云ひました、幸夫は不承知ではありましたが、王様の云ふ事を聞いて鹿十を呼び、此國では誰も勝つ事が出来ないと言ふお姫様と競走をする仕度をせよと云ひ付けました、其時にお姫様は退いて競走用の衣服を着靴を穿いて鹿十の用意の出来たのを見て、二人とも合圖を待つて駈け出そうと仕度をしました、するとお姫様は家來を呼で何時も競走の時に飲む物を飲みました、鹿十も夫を見て同じ様にやりました、其時にお姫様は用意が出来て居たので、傍へ進で來まして素早く鹿十のコップの中へ、飲めば忽ちに眠り倒れる薬を二三滴注達ました、(五)やがて合圖がありました、お姫様は非常の速力で駈け出しました、が鹿十は駈け出さずに地面へ倒れて寝込んで仕舞ひました、競走は五六哩の處であります、忽にお姫様は半分も往つて仕舞ひ、やが

て唯つた一人で決勝點へ近いて來たのを幸夫は見て屹驚り、忽ち蒼くなつて友に云ひました、『や失策つた、鹿十がまた見へない、』友は驚いて御主人、菊助に何の邊を鹿十が走つて居るかを聞いて貰ひました、『と云ひましたので、菊助は地面に耳を付けやがて鹿十は競走の始まつた處に躰を置いて寝て居りますと答へました、すると友は鏡二に鹿十の耳元へ矢を射つて目を覺まさせる様にと云ひました、鏡二は千里見通しですから過たずに云はれた通りしました、鹿十は驚いて起き上りお姫様がやがて決勝點に近いのを見て大層な速さで走り出し丁度風と一所に飛でる様に走つて忽にお姫様を追越して決勝點に入りました、(六) 股葉王は狂氣の様に驚いたり怒つたりしました、が以前に或神様を粗末にした罰として不思議な事が度々あつたのに恐れ入つた事のあ

つたを思ひ出し、是以上何を云つても無駄だと思ひましたので、幸夫を呼んで云ひました、『お前は私の云つた丈の事を皆仕遂げて仕舞つたのだから、有穂王の寶物は皆持つて行くが好い、が夫は一人で負つて往つて貰はう、』(七)

幸夫は云はれる儘に承知しまして寶物の這入つて居る庫へ通る事を許されましたので、牛兵衛を呼んで脊負はせ始めました、牛兵衛は最初人間よりも大きい金の佛様五百を脊負ひまして次にはお金を壹萬袋積み上げ、其又上に寶石入りの袋澤山を載て其外に戦に用ふ馬車數百臺と、馬數百匹を兩手に牽きまして、有穂王の取られた寶は一つも残さずに持つて仕舞ひました、(八)

一同はお城を離れて有穂王の領地の方へ急いでやつて参りますと、六人の家來と一匹の馬とが幸夫に向つて禮には何を頂けるのでしよ

うかと尋ねました、鹿十は『私の御褒美は何です、私が若競走に勝たなければ斯うやつて歸る譯には参りませんでしたらう』と云ひますと、菊助は『けれども、私が君の躰を聞き付けなかつたら如何する』と云ひますと鏡二が口を出して『二人とも僕の手柄は分つて居ようね、僕が鹿十君の耳を射なかつたら、成功はしなかつたんだよ』と云ひました、すると牛兵衛は『君達は其様議論はやめ給へ、一體誰が寶物を持つて來たと思ふ、君達の手柄も僕あればこそぢやないか』と云ひ互に頻りに議論して居りますのを幸夫は聞いて『お前方の云ふのは皆尤もだ、けれども御褒美は王様の御心任せにしなければなるまひ、王様が吾々を取り返へしにお寄越しになつたのだから、勝手に此寶を如何すると云ふ譯には行かない、けれども若王様が御褒美を下さらなかつた場合には私が引受けて必ずお前達の満足する様に心配すると一同

を宥めました、(九)

幸夫は無事に寶物を有徳王のお城へ運で参りました、王様の非常なお喜びは勿論ですが、女王も亦幸夫の勇氣には心から感心して又以前の様な考へを起しました、そして、『此様云ふ手柄をさしたのも皆妾の御蔭だから屹度妾の事を憎くは思つてまい』と勝手な考へ様をして一度逢つて話がしたいから來て呉れと御呼びになりました、(十)幸夫は此御使を受けた時に御断りを致しますとさつぱり返事をしました、女王は怒るまい事か火の様に怒つて空涙をこぼしながら眞夜中に兄の王様の處へ駆け付けまして、幸夫が自分と無理に結婚したい爲めに牛兵衛を寄越して部屋ごと持つて往かうとしました、此前にも同じ様な事をしたのですとありませぬ事を訴へまして、『何卒兄さん、此悪人を殺して頂かなければ、妾は安心して暮らして居ら

れませんと云ひました、(十二)

王様が是を聞いた時の其驚きは非常なもので幸夫程手柄のある者を罪人にするのが悲いので其夜一晚は色々考へて明してお仕舞ひになり、翌朝は幸夫の罪を調べる爲めに一先牢屋へお入れになりました、(十二)

お調べの日が來ましたが、幸夫が色々云ひ譯をしたのは皆無駄でした、誰でも女王が虚の事を御仰やるとは思ひませんから、判事は幸夫に罪があると云ひ渡し、今日胸に鐵砲三發を射込む仕置にするに極められました、(十三)

王様は涙を溢して御歸りになりましたが、心の悪い女王はお仕置までも見様として残つて居りました、役人は幸夫の傍に寄つて衣服の釦を外づし褌衣を擴げ、胸があらはに鐵砲玉を受ける様にしまし

た、すると此時雪の様に白い肌、美しい乳が現はれたので幸夫は男で
 はなくて、美しい少女である事が分りました、(十四)

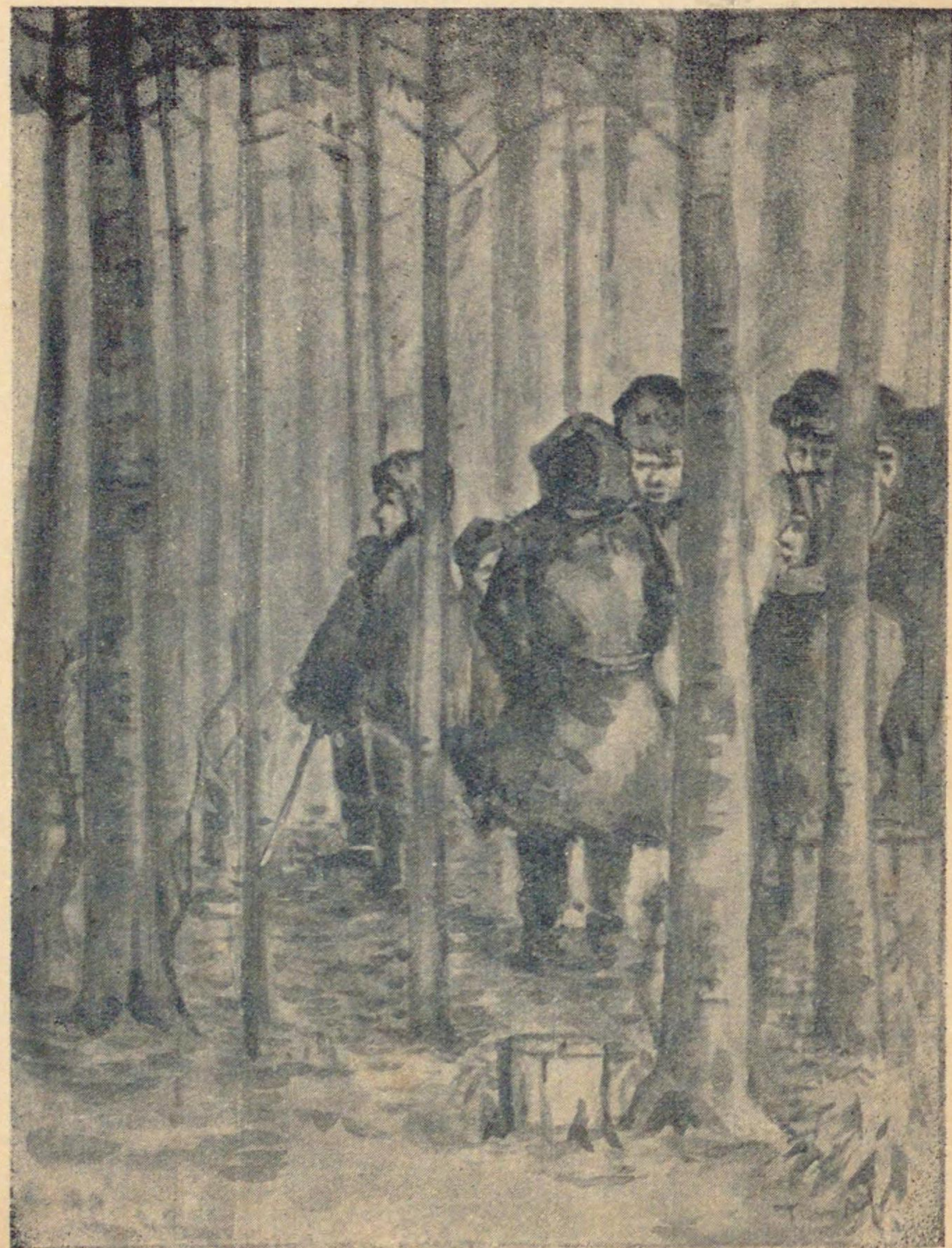
役人達の目は悉く女王に集りました幸夫が女である以上女王の云
 つた事が全くの偽であるのに驚き、又幸夫が女でありながら大層な
 勇氣を出して、此國の爲めに手柄を現はしたのに驚きました、が其
 間に女王は流石に面目なさに堪へ兼ねてか懐から鋭い短刀を取り出
 し、自分の胸に突き立て、『幸夫に罪はない、妾が悪のです』と一聲
 叫で倒れました、(十五)

幸夫は無事にお城へ歸りました、王様は妹の女王の不幸なる最期
 を悲で幾日かの喪をお勤めの上で、更めて幸夫に女王の王冠を着せ
 自分の妃になつて呉れまいかと御相談になりました、幸夫は元より
 望む處、間もなく盛大な御婚禮の式が擧げられ、年老つた伯爵も二

人の姉姫様も皆此式に列なり、そして三人とも長くお城に住ふ様に
 なりました、新しい女王は第一に友の爲めに立派な廐を建て、毎
 日御自分で見舞つては色々の事を御相談になります、其爲めに
 是から後幾度か戦争はあつたが有穂王の負けた事はなかつたので、
 牛兵衛、鹿十、鏡二、菊助、風平、山九郎、河六の六人の爲めには
 お城から一里許離れた處に城を建て、おやりなされ、澤山のお金を
 頂いて六人は茲に住まつて中よく暮し、用のある時には女王が其事
 を仰やると、離れて居てもチャンと菊助が聞き付けて、直様お城へ
 伺ふ様にして居ました、(十六)

夫から女王は始めに逢つた年老つた羊飼のお婆さんをお城へお呼
 びになりましたが、お婆さんからは何事も望み通りに往つたので安
 心して此世から、去りますから、伺ふ事は出来ません、併し何時迄

も女王の御幸福を祈りますと云ふ返事が参りました、(十七)



Every now and then they heard the howl of wolves

幾度も幾度も狼の泣聲が聞えた

七人兄弟

(上)

昔、或大きい森の傍に樵夫の夫婦が住んで居ました、夫婦の間に
 は七人の子供がありました、家は貧乏であるし子供は末の子の外
 は双生児、男ではあるが總領が十歳末が七歳で、親の手助をする事
 も出来ないのですから、夫婦は子供達の始末は如何したら好
 いかと心配して居ました、まだ其上に末の子と云ふのは病身で弱々
 しい、生れた時に大人の拇指程しかなかつたので夫婦が名を拇指七



郎と付けたと云ふ事です、けれども世間には體は小さくても利口な者がありましよう、此子も其通りです、此小さい弱い子は全く神様から智恵袋を授けられて居ました、口も録に利きませんが、チヤンと何事でも心得て居ました、(二)

母指七郎が丁度七歳になつた歳に饑饉が始まりました、食物は何でも高價くなりますし樵夫夫婦は家内中の喰べる麵包すら中々買へない事になりました、有り丈のお金は費つて仕舞ひ残つてる麵包の片が無くなれば家内中餓死をしなければならん事になりました、(三)實に悲しい心細い思ひをして夫婦は其晩焚火に當りながら如何なり行く事だらうと考へてました、子供達は既う床に就いて居ましたから夫婦は多分寢入つて居て明日の悲しい事などは夢にも知るまいと思つて居ました、(三)

『ナア女房』と黙つて居た樵夫は悲しさうな怖ろしそうな聲で話し出しました、『ナア女房、私は少し相談があるがな、お前は如何考へるか知らないが、私は如何も子供が次第に飢くなつて餓の爲めに殺されるのが可愛そうでならないから、一層明日の朝でも森へ皆を連れて往つて棄て、來た方が好いかと思ふよ、事に依つたら森の神様が罪のない子供の憐な身の上を御存知で生きて往かれる様にして下さるかも知れない、兎も角子供達の慘な死状や食べ物を慾しがら泣聲だけは聞かずに濟むよ』(四)

『まあ良人』と女房は驚いて云ひました、『如何して其様怖ろしい事を考へました、良人は神様が救けて下さるよりも早く、狼が來て子供を喰べて仕舞ふ事をお忘れになりましたか、決して其様事は妾は厭で御座います』(五)

けれども樵夫は何事でも一度心に思ひ定めた事は容易に換へない人でしたから、譯を話したり叱つたりして漸つと承知させました、『分つたかい、天道様が私等をお棄てなすつて餓死しても構つて下さらない、だから私等が何に爲らうと、何をしやうと構つたもんではないわ』と樵夫は斯う云ひました(六)

是は間違つた愚な事です、天道様は決して私達をお見棄にはなりはしませぬ、樵夫は忍耐してお救け下さる迄待てば好いのでした、左もなくば何も此様に悪事をせずと潔く死ねば好いのです、けれども樵夫は永く森に住で居て私達の様に善い事も悪い事も教へて頂く事が出来なかつたのです(七)

終 悲しそくに泣きながら女房は床に就きました、樵夫もやがて寢ました、樵夫が部屋の戸を閉めた時に、今まで樵夫と女房とが腰を

掛けて居た椅子の下から小さい黒い物が動き出したのが見へました、夫は最早消え様として居る焚火の赤い炎の方に向いて動いて来てそして座りましたので、其可愛い頭と顔とが拇指七郎であると分りました、七郎は其鋭い小さい黒い眼でヂツと紅い燃残を見詰めて何か一心に考へ込んで居る様です、やがて小さい頭で左も何事か考へ付いた様に首肯を振りました、そして自分の兄弟の寢て居る大きな部屋の方へ拔足して行きました(八)

拇指七郎は兩親の話聞きかうと思つて居たのではないので、床の中でお腹は堪らなく空るし寒くはなるので、暖まつて少しでも好い心持にならうと、椅子の下から窺つと暖る積りのが、暖まるに連れてうつかり眠て仕舞つたのでした、けれども父親が森の中へ棄て様と酷い事を云つてるのが聞へて目は覺めました、椅子の下に居るの

が見付かつては大變と兩親が部屋へ行く迄息を殺して陰れて居たのでありました、(九)

皆さんも御想像なさる通り其晩憐れな拇指七郎は極僅しか眠りませんでした、七郎は夜が明けて薄りと日光が戸に射したのを見て元氣よく起きました、そして兄弟の目を覺まささない様に家を出て近所にある小河へ行きました、そして雪の様に真白な小石を澤山拾つて小さいカクシに一杯入れました、(十)

暫くすると樵夫は楽しそうな聲で『サア子供達は皆起きな、そして私と一所に森に行かう、用があるよ、父親の薪を縛るお手傳ひをするんだ』(十一)

すると、子供達は父親の手傳ひをするのは、誰でも子供に立つのが自慢になるのですから嬉しくつて堪りません、母親も悲しそ

うな顔はして居ますが『では私も行きませうよ』と云ひました、一同は極少々の麵包を朝飯の用意に持つて森の方へ揃つて出懸けました、(十二) 夫はお天氣の好い朝でした、樹の葉は露で輝いて居ます、小鳥は枝の上で歌を謡つて居ます、目に見へる物は何でも新らしく、美しくそして静です、拇指七郎は心の内で此世界の内で如何して父親や母親の様に慘酷い事をする者があらうかと思ひました、考へながらも七郎はカクシの中から白い石を道傍へ投げる事は忘れません、そして又誰も其事には氣が付きませんでした、木立は次第に繁つて行きます、で皆は一二間宛分れくに進で跡からく付いて行きます、七郎は一番終に居ました、少し廣々した處へ出た時に、樵夫は仕事を始め、子供達はお手傳ひに一生懸命に枝を拾つては薪に束ねて居ます、拇指七郎も同じ様に働いて居ました、(十二)

皆が働いて居る間に酷い雨親は何處へか姿を匿じて仕舞いました、
そして忽に子供達の目も及ばない處へ来て家の方へ急いで歸つて行
きます、跡には可愛そうな子供達を狼の餌食にと残した儘です(十四)
やがて日が暮れ懸る、總領の太郎は『父親、母親、何處に居るの、
もう暗くなつて来たから、お家へ歸らうよ』と、大きな聲で叫びまし
たが、誰も返事をして呉れません、唯山彦が、『お家へ歸らうよ』と響
いたばかりでした、(十五)

子供達は兩親を呼びながら彼方へ駆けだしましたが、仕舞には棄
てられたと氣が付いて、皆一團になつて手を執り合つて泣き始めま
した、すると拇指七郎は話し始めました、『兄さん達、泣かなくても、
好いよ、私が家へ歸る道は知つてゐるから』と聞いて皆は大喜び、七
郎を取り巻いて全体如何して棄てられたのと熱心に尋ねました、(十六)

七郎は前の晩聞いた兩親の話を悉皆話して聞かせ『けれども心配し
なくても好いよ、私は来た路へ皆白い石を捨て、来たから、夫に隨
いて往けば森が出られるから』と云ひました、(十七)

夫から皆手を引き合つて白い石を探し、行く拇指七郎を先に立
て、翌朝は家へ歸りました、けれども兩親が死んでも好いと思つて
る事を知つてるのですから、家の中へ這入るのが怖ろしくつてもち
くして居ました、(十八)

話は戻つて、樵夫夫婦は前の日の暮れない内に家へ着きました、
何時もなら聞へる子供達の足音は聞へませぬ、今更の様に寂しくそ
して空怖ろしく感じました、二人とも顔を見合はしてまだ一言も出
さぬ内に戸口の方で聲が聞えました、(十九)

『コレ、樵夫、急場を凌ぐ吉報を持つて来たぞ、殿様が百姓ども

の難澁をお憐愍になつて肉を下さつた、而も澤山の肉だ、お前の家が家内が大勢と御存知だからだぞ、子供の澤山ある者に遣はせと殿様が仰やつた、だからお前の處は隣の家から見れば七層倍もあるわ(二十)是を聞いた樵夫は蒼くなつて慄へ出しました、愈々お救いが來た、夫も先づ子供の爲めに下すつたもの、夫だのに自分は子供達を慘酷い目に逢はして仕舞つた、樵夫は此思ひも奇らぬ殿様からのお恵みを森の役人から受取つてもお禮の聲さへ出せない程に恐れ入つて仕舞ひました、けれども心の好い役人ですから、嬉しさの餘りに聲も出ないのだと思つて首肯ながら『あゝ、私から能く殿様へ御禮を云つて置くよ、まア急いで早く料理してやんな、皆最早半分餓死しかつて居る様ではないか』と云つて役人は他の家へお恵みの品を運ぶので急いで往つて仕舞いました、(二十二)

皆さん考へて御覽なさい、此悪い二人の夫婦は子供達にと贈られた、此肉でもつて眞逆に晩飯を濟ませようとは思はなかつたでしょう、女房は泣き出しました、『まア子供だけにでも此御馳走が喰べさせ度いと思ふのに、あべこべに、狼が喰つて仕舞つたでしょう、可愛い、子供達は寂しい森の中で喰はれて仕舞ふでしょう』と云ひながら狂氣の様に悲むで、床に泣き倒れて慰め様もありません、樵夫も悲しいには悲しいが、詮方なく火を起して料理を始めました、やがて出來上つた時に、女房を呼で少し喰べろと云ひました、が女房は『否へ私は喰べません、夫よりは子供が慾しい、可愛い、子供達は何處に居ましよう』と叫びました、(二十二)

『茲に皆居ますよ、母親』と七人の子供が戸の外から聲を揃へて云ひました、聞くなり母親は喜びの餘りに聲を揚げて戸を開き、手を引

かれて立つて居る子供達に抱き付きました、(二十三)
 女房は子供達を抱いて泣いたり笑つたり、頬摺をしたり、嬉しさの餘りに氣でも違つた様に家へ引入れました、顔や手を洗つてやり、そして座らせ、自分がまだ一口も味はない出来立ての料理を喰べさせました、樵夫はと云ふと是も自分の悪い事に心を責められるのは苦しい事だと思ひ知つたのですから大層喜びました、(二十四)
 殿様から頂いた内のある肉は家内中心持よく又楽しく暮して居ました、子供達は火の傍へ進まる度ごとに、何時も拇指七郎の白石を道傍へ捨てた事の賢さには、父親の悪い考へも到底も及ばなかつた事を話して感心して居りました、(二十五)

(中)

けれども饑饉は次第に劇しくなりまして、殿様も左様くは百姓

どもに食物をお恵み下さる事が出来なくなりました、樵夫は又恐ろしい惨酷い心を起しました、再び子供達を森に連れて往つて棄て、来ようと思ひ定めました、けれども此二度目の悪事には女房が屹度承知をしまいと思つたものですから、或日女房には隣村へお救ひを願ひに出して遣りまして、其留守の間に子供達に森へ往かうと話しました、併今度は拇指七郎に氣を付けて白い石を拾はせない様に仕て居ました、けれども樵夫が皆に麵麩を少し宛分けましたので、七郎は道々氣を付けては麵麩の片を捨て、行きました、(二)
 暫くすると樵夫は此森の中で陰ン坊を仕様と云ひ出しましたが、無邪氣な子供達は喜で賛成し、樵夫が姿を匿くして子供達を棄てるには都合の好い様にしました、遊び疲れた時になつて、やつと父親の居ないのに氣が付き又棄てられたと知つて揃つて泣き始めました、

すると七郎は「兄さん、泣かないでも好いよ、僕がお家へ連れてつて上げるからと云ひました、そして直ぐと立上つて道々に棄て、来た麴の片を抜して見ましたが、まア、鳥が皆喰べて仕舞つたのか一つもありません、併指七郎は決して失望はしませんで「兄さん、僕等は前の時にも助かつたのだから、今度助からない筈はありませんよ、泣いて時間を徒に過ぎないで、今の内に急いで今夜の寢床が見付かるか如何か捜しましょう、(二二)」

子供達は七郎が伶俐である事を能く知つて居ますから、何の用でも仕ようと云ひました、夫から七郎が先立になつて人の通つた足跡を捜しました、けれども最早日は暮れました、風が吹き荒むで森の樹は呻なり、吼へ、叫び、憐れな子供達は今にも大木に押潰されでもするかと怖れ載いて居りました、(二三)

頻りに遠くで吼へる狼の聲が聞へます、大粒の雨は子供達の衣服を濡して仕舞ひました、泥濘に足を取られては、皆轉では起き泥塗れになつて仕舞ひました、仕舞に指七郎は嵐に揺ぶられて居る高い木に登りました、大膽な事です、そして小さい一寸法師としては驚く程登るのが上手でして、一番高い處からは方々が見へます、そして漸くぼつりと一つ火光のあるのを見付けましたから、其方角を確り見定めて七郎は木から下りて皆を連れて其方角へと向ひました、けれども其火光を低い地面から見付け出すのは容易な事ではありません、到底も駄目だとい同が失望しかつた時分に、思ひ懸もなく其處へ出ました、火光は森の外の大きい家から見へたのでした、(四)

子供達は直ぐと戸を叩きました、すると親切らしい女の人が出て来て、何の用かと尋ねます、七郎は進み出で、森の中で道に迷よつ

た憐れな子供達ですから、何卒今晚一晩だけ泊めて頂きたいと願ひ
 ました、親切な女の方は此可愛い七人の子供が柔い髪は濡れて顔に
 垂れ懸り、優しい目は涙で濕つてるのを見て、『可愛そうにね、お前
 達は茲が何處だか知らないンでしょう、此家はね、子供を喰べる鬼
 の棲家ですよ』と云ひました、(五)

拇指七郎は驚いて『あら、伯母さん、夫は眞箇ですか、僕等は如何
 したら好いでしよう、伯母さんが泊めて呉れなきや、狼に喰はれて
 仕舞ます、一層僕等は鬼に喰はれた方が好御座います、事に依れば
 鬼も可愛そうだと思つて、伯母さんが頼で呉れ、ば命だけは助けて
 呉れるかも知れませんもの』と頼んで見ました、(六)

鬼の女房は一晩位は自分の力で夫の目に掛らない様、七人の子供
 を匿せるだらうと思つて七郎の願ひを聞いて、家へ入れて火鉢の周

圍に座つて暖まれと云つて呉れました、火鉢では鬼のお夜食にと丸
 ことで一匹の羊を焼いて居ました、(七)

七人が少し暖まつたと思ふ時分に戸を荒々しく叩く音が聞へまし
 た、すると女の人は驚いて、『はら、あれが私の夫の鬼だよ、這入つ
 て來ない内に早く匿れなければいけないよ』と云つて、寢床の下へ入
 りて呉れました、が寢床の下は七人は這入り切れない程狭のです、(八)
 として戸口へ迎へに往つて夫を連れて來ました、鬼は女房に向つ
 て晩飯は出來て居るか、酒は注いであるかと聞きながらお膳へ向ひ
 ました、羊は直ぐと喰はれました、まだ生焼でしたが、鬼は此方が
 好きなのだそうです、(九)

羊を喰べて仕舞ふと、鬼は其處中見廻はして居ましたが、終に火
 鉢の側に子供の小さい鞆のあるのを見付けました、『是は何んだ、お

前は火鉢の側へ子供を連れて來たな、サア其子供は何處に居る」と怖ろしい聲で云ひました、(十)

『まア、良人其様に叱らなくても好御座いますよ、夫は姉娘の人形の靴ぢやありませんか』と女房が恐るゝ云ひました、是で鬼も欺まされて仕舞ふ處でした、折悪くも寒の爲めに風を引いて居た太郎が此時嚏をしました、夫を聞いた鬼は怖ろしい呻聲をして飛び上り寢床の下へ手を入れて七人の可愛い、子供を引張り出しました、(十一)

『あゝ、貴様は俺を欺したな、貴様を喰つてやつてもあきたらないんたが、年を老つて堅いから許してやる、まア此子供達が手に入れば何よりだ、丁度明後日は三人の鬼仲間を御馳走する約束だが、屹度皆大喜びだらう此御馳走があれば』と女房を叱りながら鬼は喜び獨語を云ひました(十二)

憐れな子供達は鬼の足に掛り付いて涙を流して助けて呉れと願ひましたが、此鬼は少しも情を知りません、皆の泣聲での頼みを聞きながら、焼いて置いて林檎の汁を掛けたが一番美味からうなんて話して居ました、が立ち上がつて斧を手にして子供達の頭を切らうとしました時に、女房は止めながら『お待ちなさい、此子供達は餘り疲せてますから、一日二日経つてからの方が好いでしよう』と云ひますと、鬼は拇指七郎を捕へ其腕を掴んで見て『全くだ、少し肥らせた方が好い、此子供なんざ丸で骨ばかりだ』と云ひました、(十三)

皆様、子供達は久しく何も喰べないで居た爲めに命が助かつたのです、女房は嬉しそうに、表面は夫の云ひ付けを聞いてする様に七人に夜食を持つて來て、喰べさして呉れました、お腹が空き切つて居るので嬉れしくつて仕方がありませんが、又怖いので七人共慄へ

て居りしました、鬼は夫を見ながら友達の鬼との御馳走の事を考へてはさも樂しそくに酒を飲で居りましたが、平常より遂飲み過して睡くなり、早く床に這入らねばならぬ様になりました、(十四)

やがて鬼の女房は自分の娘と同じ部屋に七人の子供達を寝かして呉れました、鬼の娘と云ふのは是も矢張り七人で、年格好も子供達と同じ位、色は白し鼻も目も口も小さくて人間と同じ様ですが、唯怖ろしい、長くて鋭くそして離れ／＼に生へて居る齒を持つて居ます、子供ですから大した悪い事も仕ませんけれども、心は親鬼と同じに荒々しくつて、若し出来れば子供達を喰ひ殺そうと云ふ怖ろしい娘です、鬼娘は早くから寝て居たので皆ぐつたりと寝て居ます、大きい寢床に並で、そして其頭には金の冠を被つて居ます、七人の子供は鬼の女房が帽子を被せて呉れたのでした、(十五)

拇指七郎は鬼が若も思ひ變へて其晩の内に皆を殺しに來はしまいかと心配しました、夫れで鬼の女房が往つて仕舞ふと直ぐ、小さい鬼娘の頭からそうつと金の冠を取り外して、是を兄弟達にも被せ自分も被り、自分達の被つて居た帽子を鬼娘に被せました、七郎は賢い用心をしたのでした、鬼は眠れない程に酔つて居たので、寝て居ながら、可愛い、お客様が呉れる結構な御馳走の事を考へて居ました、が肥らせてからと云ふのを忘れて仕舞つて直ぐに殺して置いて、翌日の朝飯に料理し様と思ひました、(十六)

夫から寢床を起き出し、斧を手にして暗闇を大勢の寝て居る部屋へと行きました、忽に床が足に觸りました、やがて子供達の頭の冠を見付けて、自分の娘だと思ひ込んで通り過ぎて外の床へ進み寄りました、そして拇指七郎外其兄弟の積りで幼い鬼娘の首を斬つて仕

舞ひました、而して自分の寢床へ歸つて行きました、勿論自分が何を仕たかは少しも知らずにです、(十七)

拇指七郎は鬼が歸つてから寢入るのを待つて居ましたが、鼾が聞へ始まると同時に兄弟を起して、急いで衣服を着て自分の跡に付いて來いと云ひました皆は云ふ通りになります、拇指七郎は皆を連れて階子段を降り、少しの音もさせずに窓の戸を開け、庭の堀を乗り越へて道へ出ました、そして夜通し、怖ろしさにぶる／＼慄へながら、何處へ行く道も知らずに一生懸命に逃げました、(十八)

翌朝鬼は目を醒まして女房を呼び「二階へ往つて七人の子供を朝飯に仕度しろ」と云ひました、鬼の女房は此言葉を聞いて喜びましたと云ふのは鬼が仕度と云つたのは料理の事だとは氣が付きませんでした、衣服を着せてやれと云ふ事と思つたからで、二階へ駆け上りました、

が部屋へ這入るなり、七人の娘達の首が無くなつて居るのを見て、吃驚仰天、悲鳴を揚げると共に氣絶して仕舞ひました、(十九)

鬼は餘り女房の來様が遅いので二階へ捜しに往きました、で此有様を見て是も氣絶でもするかと思ふ許り驚き悲しみました、樵夫よりはまだ／＼鬼ながら父親としては好いのですから、大きい聲を出し、女房を呼び蘇し二人共に悲しがつて泣きました、「女房は貴君さへ、酷い心を起さなければ、此様悲しい事にはならなかつたのですよ」と怨みを云ひますと、鬼は「いや、是は皆娘の冠を窃だあの餓鬼どもの所業だ、よし追懸けて可愛い娘たちの敵を討つてやらなければ、サア早くあの七里一足の鞆を出して呉れ」と物凄い劔幕で言ひました、女房は承知して鞆を持つて來ました、鬼は夫を穿くなり、戸外へ飛び出し、子供達を捜しにと山も林も構はず走り廻りました、(二十)

けれども拇指七郎は松の樹の頂上に腰を掛けて見張をして居たので、鬼が山も河も唯一足に踏み越へて追懸けて来たのを見て、直ぐに樹の下に降りて兄弟にさア此岩の穴へ匿れようと云ひました、そして先へ穴の中を調べ、六人の兄弟を入れて仕舞ふと石塊や樹の枝で口を閉いで仕舞ひ、自分は非常に小さいのだから鬼も決して見付けはしまひと信じて桐の葉の下へ匿れました、(二十一)

鬼は矢鱈無法に方々を走り廻はつて疲れたもので何處かで休み度いと思つて居ましたが、不思議にも子供達の匿れて居る、直傍へ来てごろりと横になりました、悲しい思ひをしたり遠道をしたり、疲れ切つて居たので忽ぐつずりと寢込で、怖ろしい大鼾をかき始めたので穴の中の子供達は恐さに慄へ上りました、此時に拇指七郎は穴からそうつと兄弟を出して、鬼の寢て居る間に急いで家の方へ歸ら

せました、そして兄弟が足手纏ひにならない様になりました、(二十二)

六人の兄弟が往つて仕舞ふと、拇指七郎はそろ／＼と鬼の傍へ這ひ寄りました、そしてそつと鬼の穿いてる靴を脱がせて自分の足に穿きました、七里一足の靴は不思議な靴ですから、如何な足にでも合ふ、小さくなれと云はれると直ぐ縮まります、で拇指七郎にも丁度好くなりました、直様夫を穿いて出掛けようとししました、が屹度鬼は靴を取り換へそうと思つて追懸けるに極まつてると思つたものですから、家の方の道へは行かずに、あべこべの方角へ向かつて往きました、(二十三)

七郎の思つた通り暫くすると鬼は目が覺めて不思議の靴の無くなつてるのを見て、大層驚きました、方々靴を披しました、靴の痕を見付け出し直様七郎の跡を追つ懸けて往きました、けれども如何し

たつて素足では七里一足の靴に叶ふ筈はありませぬ、拇指七郎は逃げながら嬉しくつて堪らず振り返へつて見ると、愚な鬼は大股に絶壁を踏み越そうと思つて、足を踏み外づして真逆様に谷底へ落ちて仕舞ひました、其大きな体が岩から岩へ打付かつて落ちて行く音が反響に響いて聞へました、流石の七郎も恐ろしさに息が止まる様に思ひました、(廿四)

(下)

拇指七郎は疲もしたし、お腹も減りましたので、大きい町の方へ急いで行きました、大層遠い處なのですが不思議の靴があるもので瞬く間に着きました、人の好さそうな田舎の婆さんに麵麩と乳とを貰ひました、其時に町の角には澤山人が集まつて、何か議論したり騒いだり仕て居るのを見ましたので、彼の人達は何事があるのです

かと尋ねて見ました、(一)

するとお婆さんは『此國の兵隊さんが茲からは大分遠い處で戦をして居るのですが、何でも敵に圍まれて、多分大負になるだらうと云ふ噂があるのです、夫だのに王様は今敵の援兵が後からどんく進でるとお聞きになつたし大將は敵の模様を何にも知る事が出来ないのです、夫であの通り皆して如何かして早く兵隊に知らせる事は出来まいかと相談をして居るのですよ』と話しました、(二)

『左様云ふ用なら僕が行けば一番だ、一時間もあれば往つて返へつて来るがナア』と拇指七郎の言葉を聞いて、お婆さんは首を振り『坊ちゃん、其様事云つたつて百里も二百里もある處なですよ』と云ひますと、『だつて僕の靴は七里一跨ぎだ、今は此様に小さいけれども歩き出せば一足が七里あるンだよ』と七郎は尙言葉を續けました、(三)

此言葉聞いてもお婆さんには何だか分りませんでした、けれども七郎の余り小さいのを見て、事に依つたら神様の様なものかも知れないと思つたので、一所にお出なさいと云つて、自分が先立に王様のお城へ連れて往きました、二人がお城へ着いた時に王様は大廣間でお付の役人と頻りに話をしてお出でした、王様は如何に卑しい者とも話したり逢つたりする事をお嫌ひにはならない方であるので、拇指七郎の申し上げる事も喜でお聞きになりました、そして不思議の靴の話がお分りになつた時には大層な御満足で、お婆さんにも好く此子供を連れて來たとて御褒美を下さり、そして直ぐ大將へ宛てゝの手紙をば七郎に御渡しになりました、(四)

拇指七郎は靴に進めと命令して置いて、直様云ひ渡された方角へ足を運びました、二三分の間に七郎は最早廣い野原の真中にある陣

屋へ着きました、そして王様からの手紙を持つて來たのだから將軍にお目に懸り度いと門番に云ひました、將軍は餘り使者の小さいのに驚きました、王様の手紙を見てからは是は拇指七郎殿、大層お骨折であつた、何卒座つて何か喰べて下さい、吾々は直様敵を攻めて援兵の來ない間に負して仕舞はねばなりませんから』と云ました、(五)

拇指七郎は立派な御馳走を頂いて大喜びです、すつかり喰べて仕舞つて大將に向つて、何か外に御用はないでしょうかと尋ねますと、『いや、有ります、若し願へるなら彼の山を越へて、此噂が眞實か如何かを確かめて下されば實に結構です』と大將は云ひました、(六)

七郎は直ぐと出掛けました、一足が七里ですから譯はありませんが、忽に敵の方で斯何處でも見通しにされては叶はないと思ふ程に色々大將の用事をしました、夫で敵の方では仕方がないので拇指七郎

を友達に持つた大將には大層都合の好い和睦の相談をして來ました、
愈々仲直りと極まる迄七郎は兵隊と一所に居つて町へ歸りますと、
王様からは大變なお褒め言葉、大變な褒美の品を下さいました、兵
隊迄が思ひくゝに分捕物なぞを分けて呉れたので七郎は一度に金持
になつて仕舞ひました、(七)

其時に七郎は父親や母親に逢ひに行き兩親は勿論兄弟にも樂をさ
せ様と考へました、夫から七里一足の靴を穿いて田舎の家の方へ出
懸けました、田舎の七郎の家の方では此間に何事が起つて居ましたよ
う、(八)

酷たらしい父親が子供達を森へ棄て、來た其翌日、森の番人が又
樵夫の小屋へやつて來ました、今度は麥の粉を少しと豚を半匹、殿
様が百姓どもを助ける爲めに土地を賣つて買つて下すつたのだと云

つて持つて來ました、處が小屋には女房が唯一人悲しそくに泣いて
居るので番人は驚吃しまア如何かしたかい、子供達は何處へ往つた、
私の友達の七郎、殿様のお好きの拇指七郎は何處へ參つた、と尋ね
ました、(九)

子を奪られた母親は唯涙に咽ぶ許りです、番人は何か悪い事があ
るなと感付きましたから頻りに問ひ糺しましたもので、母親は匿し
切れず悉皆事情を打明けました、番人は非常に吃驚し、直様村の方
へ參まして、村の人を呼び集めて樵夫夫婦を罪人として捕へて仕舞
ひました、(十)

夫で拇指七郎を殘して外の六人が家へ歸つた時には誰も居ません
でしたが、村の人が慌て、忘れて往つたと見へて膳棚には豚も麥粉
も置いてありました、總領の兄は是を見付けて「今の内に少し喰べて

置かうと云ひました、而して火を起したり、肉を切つたり、麥粉で少し許の菓子を焼いて、皆して夫を喰べました、(十二)

子供達は夜になつても両親の歸つて来ないのに驚きました、が戸を締めて利口な拇指七郎が早く歸つて来れば好いと思ひながら寝て仕舞ひました、けれども両親も七郎も歸つて来ません、六人は相談して何とか便のある迄は茲に居る事に極めました、幸に肉も粉も澤山にありますので先づ／＼楽しく暮して居ました、(十二)

暫くして、拇指七郎の歸つて来たのを見た時に七人の兄弟は大層喜びました、皆七郎に絶り付きそして頬摺をし大騒をして喜びました、火をどん／＼起し夫を圍で座りました、七郎が中央で、左に三人右に三人座つた處で七郎は鬼を退治した話や自分が大層幸福な身になつた事を話しました、(十三)

「あゝ、七郎、私達は又お前に厄介を掛けなければならぬ、と云ふのは私達は何だか變になつちまつたんだもの」と兄の太郎が云ひました、「併、母親は何處に居ると七郎は尋ねましたが、誰も何と返事をする事も出来ません、六人が歸つてから唯の一人も小屋の近所に人が来ないのですから聞き合せる事も出来ないのでした、(十四)

「夫では僕が明日の朝、町へ往つて一つ探して来よう」と拇指七郎が云ふので皆は安心して、其夜はお話をしたり笑つたり嬉しさの餘りに踊つたり狂つたり仕て居ました、焚火の火に赤く見へる七人の顔はさも／＼楽しそうに見へました、(十五)

翌る朝早く七郎は七里一足の靴を穿いて出掛けますと僅十哩ばかりの町へは一分間も経たない内に着きました、町では何か頻りに騒いでる様です、大勢の人は芝原へ集まつて皆何か話して居ます、七

郎は直様其中へ這入つて一人の女の人に何事かと尋ねました、(十六)
 此女は外の町の人ですから、拇指七郎を知りません、又知つてる
 人でも、新らしい好い衣服を着て好い靴を穿いてるのを七郎とは氣
 が付かなかつたでしょう、『まア坊ちゃん、殿様が今子殺の『夫夫婦
 の裁判をしてお仕置をなさるんですつて、此夫婦はね、罪もない七
 人の子を狼に喰はせ様としたんですつて』と女は話しました、(十七)
 あゝ、是こそ父親や母親に違いない、是は斯うしては居られない
 と、七郎は直ぐに家へ歸りまして、六人の兄弟に云ひました、『さア
 早く大急ぎに町まで往つて、皆が無事で居る事を殿様に見せなけれ
 ばならないよ』と聞いて六人共もう一生懸命に走りました、(十八)
 拇指七郎は六人の先立になり、手を引き合つて珠數繋ぎし、先づ
 第一に森の役人の家へ行きました、役人が如何なに驚きましたらう、

七人が揃つて無事にやつて來たのですもの、(十九)
 七郎が色々話をしましたら、森の役人も不思議がつて殿様の前へ
 連れて行きました、殿様も七郎の話を大層面白がつてお聞きになり
 ました、七人共生きて歸つたと云ふので樵夫の夫婦は死刑だけは許
 して頂く事が出来ました、けれども殿様は母の方は子供の世話をさ
 せる爲めにとて御許しになりましたが、樵夫は暫くの間牢屋へ入れ
 られる事になりました、(二十)
 夫から殿様は拇指七郎に兵隊を連れさせて鬼の住家が如何なつて
 るか、鬼の女房は如何して居るかを見せにお遣しになりました、如
 何してだか分りませんが、鬼の女房は死んで居ました、で殿様は鬼
 を退治た褒美として鬼の持つて居た領地も、寶物も皆拇指七郎に下
 さいました、(二十一)

其處で七郎は、一度は怖ろしい思ひをし恐い目に逢つた此家に住む事にして六人の兄弟や母親、夫から又許されて歸つた父親と一所に住んで居ました、(二十二)

七郎は七里一足の靴の爲めに大層もないお金持となりました、と云ふのは誰でも遠方へ急に用のある人などの使をしたり、手紙を持つて往つてやりましては、其旅行、七郎には僅二足か三足のお禮として澤山のお金を貰ひましたから、七郎はちきに大そう立派な財産家になりました、(二十三)



お宅へ置いて下さいと猫は頼みました

小 猫 物 語

(上)

昔、一人の粉磨がありました、気が強くて伶俐で怖い物がないと云ふ人でありましたが、或日磨き上げた粉を幾袋か町まで持つて行く事になりました、町へ行く途は森を抜けて行くくと本道を行くよりは大層近いので隣の人が止めるのも肯かずに、薄暗い気味の悪い道も構はずに出掛けました、隣の人の怯々して居るのは可笑しい、古い櫨の木の枝や葉が緑門の様に空を掩つて夏の日の熱いのを遮ぎつ



て如何程樂か分りはしない、樹の蔭を見て驚く程の臆病者でなかつたのは我ながら仕合せだと粉磨は笑つて居りました、(一)

粉磨は楽しい旅をしました、山鳩は樹の上で歌つて居ります、蜂や蜻蛉は飛び廻はつて居ますし、地面は一杯に美しい色々の花が咲いて飾られて居ます、粉磨は此美しい森の景色に見惚れて方々を眺めて居る内に、一匹の小猫が大きな蛇にからみ付かれて居るのを見ました、蛇は猫の體を巻いて今や咽喉を締めて殺そうとして居る、小猫は最早助けを求め聲すら出ないのでありました、(二)

粉磨は動物に親切な人でした、而し又云ふ迄もなく強い人でありますから、忽に駆け寄りました、直と蛇の咽喉を押へて猫には一つの傷も付かない様に巻き付いたのを引放して蛇をば力一杯樹の間から向ふを流れて居る深い谷川の中へ投げ込みました、(三)

小猫は危い處を助けられたので嬉しかつたのでしよう、粉磨の足許を駆け廻はり、靴にじやれ付いて放れないので粉磨は一步も進める事が出来なくなりました、『おい／＼退いて呉れ、そしてお前は早く家へお歸り、森の中なんぞに遊で居ると又怖い目に逢ふよ、猫や』と笑ひながら云ひますと、(四)

不思議にも小猫は粉磨の顔を見上げながら、『難有う御座いますが、私は家はありません、此森の中に住む積りでしたけれども最早怖いから止めましよう、私は此森の悪魔に憎まれて居るので夫で先程の蛇も慥に悪魔の使に違ひありません、私を殺そうとして來たのです』と云ひました、『では私の家へお出で喜で世話をして上げる、私の家では丁度鼠が多くて困つて居る處だから』と粉磨は云ひました、(五)

小猫は大喜び、粉磨の跡へ従いて尻尾を立て、咽喉を鳴らして御

供をして行きました、粉磨が粉を賣つて歸り途に就く頃にはもう日が暮れ懸りましたが粉磨は又元來た森の道へ行かうとしますのを小猫は頻りに止めます『森の悪魔と云ふのは中々悪い奴です、貴君も私を救けて下さつたから吃度怨で仕返へしを仕様として居るに違ひありません、明るい内なら兎も角暗くなつてからは危う御座いますから、是非本道を行きましよう』と云ふので粉磨も此言葉に従つて小猫と一所に本道を歸りました、(六)

家へ歸ると子供が三人喜で飛出て迎へました、粉磨のお神さんと云ふのは既に死んで仕舞つて、此三人の子供は親切なお爺さんを頼んで世話をして貰つて居るのでした、子供三人の名は兄を松太郎、中を竹吉、三番目の弟が梅之助と云ふのです、(七)

三人とも小猫の來たのを見て大喜びで話を始めました、『お父さん

く、まア何て綺麗な猫でしょう、何處から連れて來たのです、『森から連れて來たよ、此の家に居たいと云ふんだからね、お前達も親切にしてやんなさいよ』と粉磨は云ひました、『可愛がつてやりましよう、是から私の乳を半分だけ晩の御飯の時に分けてやります』と云つて小猫を抱いて可愛がつてやつたのは末の梅之助でした、梅之助は云つた通りにしました、夫ばかりでなく色々と親切にしてやりました、(八)

松太郎と竹吉とは左程には此小猫を可愛がりません、麵麩の破片でさへ決して與つた事が無かつたほです、と云ふのは二人とも慾深で自分勝手に、意地が悪くつて其上に狡猾子でしたから、お父さんや梅之助が居ない時には二人して小猫を打つたり蹴つたり苛めた事も一度や二度ではありませんでした、(九)

幾年も幾年も経ちました、三人の子供は皆大きくなりました、兄

の二人は大きくなつてもまだ意地悪るで我儘者ですが、弟は勇氣があつて親切でそして人の事には自分の事を棄て、も心配してゐると云ふ風でした、ですから世間の人も末の梅之助を粉磨が可愛がるのを決して無理とは思ひませんでした、何時でも粉磨は梅之助と昔から少しも年も取らず變りもしない小猫を連れては遊びに出るのを見たのです、(十)

終に憐れな粉磨は重い病氣に罹りました、そしてもう助からないと云ふ事になりましたので、兄の二人が水車場へ往つて粉を磨く方の用事をして居る間に梅之助は女の様に優しく而して又注意深く一生懸命に看病して居りました、(十二)

小猫は梅之助を手傳つて病人の枕元で看病して居りましたが梅之助が居なくなつた隙には病人と長く色々の話をして居りました、小

猫は決して外の人の居る處では話をしなかつたのです、或日梅之助は何時病人の枕元に居る筈の小猫の見えないのに気が付きました、何處へ行つたかと父に尋ねました、「悴よ、私は最早おきに死ぬのだ、だから今の内に遺言をして置かなければならないから、今小猫に公證人と呼ばびにやつたのだよ」と父は苦しい息を吐いて云ひました、(十一)

暫くすると公證人は小猫と一所にやつて來ました、粉磨は梅之助を病室から退かせ而して遺言の證人になる爲めに家の世話をする老人と召使の若い者とを呼びました、梅之助は非常に悲しくつて堪らず遺言の濟む迄竈の處へ往つて泣いて居ました、(十三)

けれども兄二人は自分の事ばかり心配して居る人ですから悲し相にも見えず、梅之助の泣いて居るのを見てコソコソ話をして居ます、「泣いて人を欺そうとしてるんだね彼奴は、而してお父さんの水車小

屋を譲つて貰はうと思つて』(十四)

間もなく粉磨は死にました、そして葬式も済み、遺言状は一同の前で開かれました、粉磨は總領の松太郎に水車小屋を譲り次の竹吉に驢馬を譲つて、梅之助には唯小猫一疋を譲つたのでした、(十五)

(中)

梅之助は父を喪つた悲みの其上に一錢の金も貰ふ事が出来ないのを知つて大層失望して力を落しました、父の死んだ古い部屋へ這入つて此先の事を考へ様と思つて坐り込みました、秋の風は悲しそうに庭の樹に呻つて居ります、枯れた柳の枝は窓の格子を叩いて如何にも梅之助の身の上を氣の毒がる様子に見へました、(一)

『如何したら好いだらう、如何仕よう』と梅之助は獨語を云ひました、『兄様達は水車小屋に一所に住ふだらうが私は宿無だ、松さんは驢馬

が居なければ仕事が出来ないから屹度竹さんと一所に住まふに違ひない、屹度兄様達は私が若一所に置いて呉れと云つたつて承知も仕て呉れまいし、私は小猫を連れて路頭に迷はねばならない、私が若し何か喰べようとすれば小猫を殺して皮でも賣らなければならず、其様事は如何したつて出来はしない、(二)

と云つて居る處へ庭の松の樹からガサツと音がして机の上へ飛んで降りたのは小猫でした、考へ込んで居る梅之助の腕を軽く叩きながら『若旦那、其様に御心配なさらなくつても好う御座います目先に見えて居る心配と云ふものは却て幸ひの種になる事があります、何卒奇麗な靴一足と袋を一つ、是丈を私に下さい、而したら、お父さんからお譲の品として私が左程詰らまい者でない事が分りますよ』と云ひました、(三)

梅之助は猫が話をするのを聞いて大層屹驚しました、以前父の部屋で父と小猫との外には誰も居ないのに話聲の聞えた事のあつた時にも全く空耳であると許り信じて居たのは、小猫が此家に來た時に粉磨に頼んで自分が外の猫よりは優れて居て話迄出来る事は子供達に話して呉れるなと頼んだのを粉磨が正直に守つて少しも知らせずに居たのでありました、(四)

『是はまア如何したと云ふことだ、一体お前は誰だ、何だ』と梅之助は尋ねました、『私は貴君のお父さんの古い猫です、で今では貴君のですよ、旦那様』と小猫はお辭儀をしながら云ひました、『けれども、一体誰がお前に人間と同じに話の出来る様に教へたのだらう』と不思議そうに梅之助は叫びました、『あゝ夫よりは貴君は靴を買つて下さいますか』と猫は催促をしました、(五)

『よろしい、仕合の好い様にと私が誕生の時にお祖母さんが下さつた、此私には唯つた一つしかない金貸で買はう』と梅之助の言葉を聞いて猫は嬉しそうに『夫は屹度貴君の仕合を好くします、旦那様、泣くのをお止め下さい、而して明朝は是から先に何でも面白い事があると思つて心持を楽しく持つて下さ』と云ひました、(六)

梅之助は其晩町へ往つて小猫に丁度好さそうな綺麗な靴を一足と皮で出來た立派な袋を一つ買つて來ました、梅之助も腹の中では口の利ける小猫の云ふ事であるから何でも是は不思議な事があるに違いないと思つたのでした、其翌日此不幸な若者が思つて居た通りに自分勝手な二人の兄は水車小屋から出て呉れと云ひました、云はれる儘に立退いて何處かに住處を捜さうと小猫と一所に出掛けました、(七)

鬼の公園の入口の處に住む人もない壊れ懸つたぼろ／＼の小屋があるのを見付けました、是迄話には此處に居る鬼の怖ろしい事を聞いて居ました、梅之助も父に負けず大胆な若者でありますから少し位の怖ろしさよりは住居を得た方が好いと思ひました、(八)
夫で、梅之助と小猫とは世間の人が近付く事さへ怖がる此家に暫く滞在する事にしました、翌日小猫は靴を穿き、袋を肩から掛けて梅之助の前へ出て來ました、靴を穿いたのが非常に嬉しいと見へて外へ行く前に一寸夫を主人に見せ度くなつたのでしよう、(九)
『如何です、旦那様、斯やると何だか軍人の様に見へるでしやう』と小猫は尋ねます、梅之助は是を聞いて笑ひながら、夫なら鬼の方で怖がつて攻めても來まいと冗談を云ふのを聞いて喜び勇んで小猫は何處へか往つて仕舞ひました、(十)

小猫は袋の中へは兎の好きな、好い香のする芹と糠とを入れて、大急ぎで兎の巢の傍へ行きましました、而して袋を廣げて云ふまでもなく袋には紐が付いて居ります(自分は藪の蔭に隠れました、暫くすると肥つた二匹の兎が香氣を嗅ぎ付けて出て來まして袋の中へ匍匐込みました、小猫は直様袋の紐を確く締めて兎の這入つた儘袋を擔いで王様のお城へと急ぎました、御門へ着くや否や王様にお目通りが仕度いと願ひ出しました、(十二)
門番は猫が物を云ふと云ふので大層驚いて是を王様に申上げる、王様も亦是は珍らしい猫であると不思議がつて御覽にならうと云ふ事で小猫の願ひは叶ひました、(十二)
小猫は髭を捻りながら、四邊の美しい飾物や何やらをチロリ／＼と見ながら威儀を正して王様の御前まで進で行きました、そして町

嚙に頭を下げ、王様から何處から参つたか、何用かとお尋があるのを待つて申しあげました、「陛下、私の主人唐場侯爵は小猫が自分勝手に主人の梅之助に付つた名前ですは陛下に熱心なる忠臣である事の證として、私を以つて此の兎を献上致すのであります」(十三)

王様は猫の話聞いて驚きながら「お、候爵に宜しく申せ、贈物は儘に受取つた、其上に禮儀正しき使者を選まれたのを深く満足に思ふと傳へて呉れ」とお答になりました、(十四)

「陛下の思召は難有い事で御座います、私は猫の國の生れで唯憐れな猫一匹で御座いますけれども、私の主人は大層凝り性で御座いますので、兵隊なぞを差遣しましても珍らしくもないと考へ、夫で代りに私を寄越しましたので御座います」と申し上げました、(十五)

「は、ア、ではお前の御主人は話の出来る猫ばかりを召使つて居ら

れるのか」とお尋ねになりましたから、小猫は、「否え、主人の召使は私の外は目に見へません者ばかり、如何も見へる召使は五月蠅くていかんと申しまして」と申し上げました、(十六)

「夫は一段と變つた好みである、で何故お前の主人は茲へは來た事がないのか」と王様がお尋ねになりますと小猫は髭を捻りながら「實際夫は、エヘン、陛下が御領分の事を御考へになつて私の主人が伺はぬ事を御許し下さらねばなりません、夫は勿論陛下の御國は廣し御威勢に従はなければならぬので御座います、宮中でも又色々な考を持つて居りますから」と言葉を濁して申し上げました、(十七)

是を聞いた王様は唐場侯と云ふのは非常に豪い人であると思ひ込んで小猫の爲めに一杯喰はされたのも知らずに色々の贈物の外に澤山にお金の這入つてる財布迄下すつて小猫をお歸しになりました、(十八)

小猫は其足で料理屋の店へ行きました、而して主人の食料に油煎の肉、自分には猫の食物を少し買つて嬉しそうに仕て歸りました、(九) 次の日小猫は誰も決して這入らうともしない奇麗に掃除のしてある鬼の邸内へ這入つて行き今度は袋の中の小麦を餌にして二羽の雉子を捕りました、(二十)

此雉子を持つて小猫は又王様のお城へ参りお許を得て王様の御前へ出て献上致しました、王様は少し話をする事を御許しになりました、と云ふのは貴君方なら大人の様に話をなさる様になつても不思議は少しもありませんが、猫が話をするのは餘程おかしいと御考へになりましたからです、(二十一)

王様は小猫と話をなすつて面白がつてお出で、王様は自分の家來の中には是程利口な氣の利いた者もなければ、是程自分の相手

の出来る者はないと仰やつた、而して或日の如きはお姫様迄呼で此驚く可き猫を御見せになりました、(二十二)

お姫様は大層美しい而して親切な、小猫にも優しくして下さる、

お姫様が妾は斯様面白い可愛い、者を見た事がないと仰やるのを聞いて小猫は咽喉を鳴らして喜びました、(二十三)

『あゝ、夫ならばお姫様は私の主人唐場侯を御覧になつたら何と仰やるでしよう』と目を丸くして云ひました、『私も是非唐場侯が一度尋ねて呉れ、ば好いと思ふが、私が是非お近付きになり度いと言傳をしてお呉れ』と王様が仰やいました、小猫は大威張で家へ歸り此事を詳しく主人に話しました、すると梅之助は頭を振つて、『馬鹿な事を云つてるね、お前一體、此先が如何なると思ふんだい』と云ひました、『まア、見て居らつしやい』と小猫は髭を捻つて澄まして居ました、(二十四)

暫くの間、宮中の人々は此小猫を羨む様になりました、夫は王様が段々に猫を御寵愛なすつて今では慥に非常な名譽である處の朝御召換のお部屋へ迄這入る事を許されると云ふ噂さへあつたのです、のみならず王様は御手づから小猫の首へ赤いリボンを巻いて美しい首輪を拵へて下さいましたので、御家來が皆小猫を羨む様になつたのです、而して小猫も粉磨の息子も楽しく暮らして居られる程の大した頂戴物を自分達の方へ取つて仕舞ひ度いと思つたのでした、(二十五) 或日の事、小猫は王様が明日は河に沿つて景色の好い處を馬車に乗つて歩いて見ようとお姫様と話してお出なさるのを聞き込みました、而して小猫にも鬼の公園の方にも好い景色の處があるかとお尋ねになりました、(二十六)

茲で小猫は慥に王様の馬車は鬼の公園の傍まで來るに違いない、

而して唐場侯爵が如何な風に生活して居るかを見付け出そうとして居るのであると思ひました、で大急ぎに家へ歸り主人に云ひました、「若し貴君が私の云ふ通りになされば貴君の御運は屹度向いて來ます、明日は河へ往つて泳ぎなさい、私が場所を云ひますから」と、(二十七) 翌日侯爵は小猫の云ふ通りに仕ました、主人が河の中へ飛び込むや否や、利口な小猫は直に主人の衣服を他へ持つて往つて仕舞つて、夫を大きい石の下へ隠しました、若い侯爵が泳いで居る内に王様の馬車や大勢の御家來が茲へやつて來ました、目の前に行列が見へる様になつた時に小猫は大聲を上げて續けざまに叫びました、「助けて下さい、助けて下さい、私の主人の唐場侯が今水に溺れます、王様は此聲に驚いて馬車の窓から見ますと自分のお氣に入りの小猫です、から、直と二人の家來を助けに御遣しになりました、(二十八)

若い侯爵は水から救ひ上げられ着物を探すけれども見當りません、利口な猫は此方へ往つたり、彼方へ往つたり捜して、如何しても見付からない風をして、大きい聲で是は慥に盗られたに違いないが、着物がなくては凍へて死なれるかも知れないと云ひました、(二十九) すると王様は幸に馬車の中に自分の着物が一襲あると仰やつた、一同は如何なる事かと思つて居ますと(私は慥に小猫だけは承知して居たと思ひます)、王様は唐場侯爵に向つて何卒是を着て下さいと仰やりました、(三十)

其處で唐場侯爵は王様の着物を身に着けました、着物が立派ですから非常に美しい殿様になつて仕舞いました、王様は隔てのない、親切らしい顔で侯爵を見ながら無理矢理に自分の馬車へ載せ、そして姫君と三人で話をしながら馬車を進めさせました、小猫は計略が

巧く成功したのを見て喜びながら、急いで飛で行きました、而して大きい野原に出て、草を刈つて居る男を捕へては王様に必ずお尋ねになるから此土地は皆唐場侯爵のだと云はないと大變な重い罪になつて打殺されて仕舞ふと話して廻りました、(三十一)

何にも知らない百姓は小猫の怖ろしい容子に吃驚し、おまけに話をしたり、靴を穿いて歩いたりするのに驚いて居ますから否やとは決して云ひませんでした、夫で王様が茲へ來蒐り廣々とした豊かな麥圃を眺めて、『是は何處の殿様が收獲をするのか』とお尋になつた時に如何の百姓も如何の百姓も『是は私の殿様唐場侯爵ので御座います』とお答をしました、(三十二)

(下)

此間に猫はドン／＼走つて或る美しい草の多い羊の澤山に居る牧

場へ来ました、而して牧者に『最少し経つて王様が此牧場は誰のかとお尋ねになつたら唐場侯爵のだと云へ、左もないとお前達は粉々に切られて仕舞ふよと云ひました、(二)』

牧者も此靴を穿いた化者に驚かされて其通りに申しましようといひました、暫くして王様が馬車の窓から顔をお出しになつて『此美しい牧場と羊は何人のものであるか』とお尋ねになりますと、大勢の牧者は『是は私共の主人唐場侯爵の御座います』と答へました、(三)』

やがて猫は獸番人や山番の家へ行きまして『若王様が此邊の山や森は誰のだとお尋になつたら唐場侯爵のですと云はなきやいけない、若夫がいやならばつゝ切りにされるよ』と云つて廻りました、(三)』

王様が森に差蒐つて来ると鹿が走り廻はつて居るのが見へます『此山林は誰のであるか』とお尋になりますと、山番は唐場侯爵の御座

います』とお答をしました、(四)』

すると王様はにこ／＼して唐場侯爵に向つて『侯爵、貴君は立派な領地を持つて居られますね、私は此邊は鬼の領分だとばかり思つてましたが、貴君の事を鬼と云ふのは不思議だ』と仰やいました、(五)』

侯爵は優しい目を俯かせて『世間の人の云ふのは當てにならない事が多う御座います』と申し上げました、此間に猫は風の吹く様な速さで飛で行き、子供を取つて喰ふと云ふ怖ろしい鬼の住居として人の知つてる立派なお城へと参りました、(六)』

けれども此怖ろしい鬼も真逆に猫を喰ふと云ふ評判は聞かなかつたので小猫は大胆にも入口の呼鈴を鳴らしました、すると鬼が自身で出て来て戸を開けました、何故と云ふと鬼は自分の部屋から小猫のお城の門を這入つて来るのを見付けて誰だか見分ける事が出来ず、

屹度極上等の晩の御馳走になる様な小供が来たのに違いなと思つたので態々出て来たのでした。(七)

『猫が呼鈴を鳴らしたのか』と猫が返事をしようとは思ひませんから、獨語の様に鬼は怒つた聲で云ひました、『否、私は唐場侯の總理大臣で、蟹春國王のお氣に入りの靴を穿いた小猫です』と小猫は威張つて云ひました、夫を聞くと鬼は左も面白そうに『お、お前の王様なら私にも友達だらう、して何の用事だ』と云ひますと小猫は此鬼が餘り利口でないと思ひましたので成る可く六ヶ敷そうな言葉で『天上天下で誰より一番豪いと云ふ鬼様に、是非御懇親を願ひ度い、御懇親を願つて、鬼様の御利益を以て仕合の好くなる様に致し度いと思ひまして』と喋舌りました。(八)

早口に喋られたので鬼には能くは分らなかつた様子ですが、左も

能く分つた様な顔をして『では這入れ』と云ひました。(九)

猫は此返事なら大丈夫と安心して城の中へ這入りました、お城は宏大な建物で立派な道具や寶物が一杯にあります、小猫は床に頭を届く程叮嚀にお辭儀をして『噂には度々聞いて居ります、虚か誠か是非其伺い度いと申すのは、鬼様の豪い處は何でも思ひ通りの大きい獸に變る事がお出来になるのだそうで、其事が伺い度いので御座います』と尋ねました、『あ、夫は出来るとも、夫がお前見たいのか』と鬼は小猫の餘りに禮儀正しくするので喜で打解けた様子で云ひました、『いや、全く其御手並を拜見したらば光榮に存じます』と小猫は咽喉を鳴らして喜で見せました。(十)

忽の内に鬼の居た處へ大きい象が立つて居ます、小猫は驚いて大聲を揚げて『コレは大變だ、いや此世界には決してもう是程豪い鬼様

は現はれますまい』と褒めそやしました、『此様事は何でもないさ』と鬼が云つたかと思ふと象は忽に獅子に變りました、小猫は本當に驚いて部屋の桷へ駆け登つて鬼が元の形になる迄下りて來ませんでした、

(十二)

『いや全く、世間で貴君の大層な術を傳へて此上もない豪い鬼様だと云ふが儘に其通りです、けれども私の思ふに貴君の御身分では實際卑しい事であるかも知れませんが、犬とか鼠とか云ふ様な小さい獸にはなれませんでしようね』と小猫の言葉を聞いて『では見せてやろう』と鬼はお世辭に乗せられて云ひました、(十二)

暫くすると鬼は犬になつて小猫に飛び蒐りました、小猫が其顔を引掻いてやると、今度は鼠になり而して又廿日鼠になりました、而して床を走り廻はるのを見た小猫は突然飛び付つて噛み殺して仕

舞ひました、(十三)

鬼は此お城に自分一人で住むで居たのです、何故と云ふとひよつとしてお腹が空くと誰でも構はず食殺すので夫を怖がつて誰一人雇はれる者がなかつたからであります、ですから小猫が前に云つた目に見へない家來が居ても誰からも小言も妨げも受けなかつたのでした、(十四)

小猫は丁度其時に廣間の窓から王様の馬車の通り過ぎるのを見付けて駆け出して叫びました、『御主人、唐場侯爵茲へ御這入りになつてお茶でも召し上げる様に陛下に御願ひになつては如何ですか、『考へて御覽、私の様な卑しい者が陛下のお出を願ふなんて飛でもない』と主人は顔を蹙めて云ひました、すると王様は笑ひながら『私は貴君の家來の質樸な忠義が氣に入つた、失望させないで御邪魔しよう』と仰

やいました、(十五)
其處で馬車は城の門から這入る様に命じて一同城内へ這入りまし
た、其處には鬼が喰べる毎日の晝飯が既に陳べてありました、幸に
も赤兒の蒸したのなぞはありませんでした、牛の頭だの七面鳥だの
鶯鳥だの色々の鳥だの、獸の舌や股だの腰だのとお菓子や口取は數
へ切れない程、皆鬼が毎日喰べる御馳走が並で居ました、(十六)
『陛下何卒何にも無いと同じ御馳走では御座います、主人一人に用
意しました少々許の御馳走で恐縮で御座います』と小猫は叮嚀に頭を
下げて云ひました、すると王様は『いや、是は大した御馳走だ』と仰や
つて一同と共に席にお着きになりました、方々お歩きになつて丁度
お腹が空いたと見へまして澤山食べたり飲んだりなされて、唐場侯爵
の目に見へない料理人はど上手な料理は始めてだと仰いました、(十七)

二時間ばかりで食事は済みました、王様は城の中を見たいと仰や
るので小猫は直ぐに御案内を申し宛然長く茲に住で居て何でも知つ
て居る者の様に御説明を申上げました、(十八)
王様はお歸りになつてからも、此唐場侯の人物が氣に入つた上に
非常な豊かな暮しである事を考へて居られました、遂には自分の娘
の婿にしようとお極めになりました、此時に小猫と梅之助とは鬼の
城に二人きりで残つたのでした、梅之助は不思議な事ばかりで合點
か行かないので詳しい話を小猫から聞き可笑くつて堪らず吹き出し
て笑ひました、『お前は實に敏捷智恵者だ、けれども私は自分のもの
でもない此城に居るのは嫌だよ、鬼の親類にでも渡さなければ』と梅
之助が云ひますと、小猫は『鬼の親類ですつて、鬼には一人も親類は
ありません、皆昔喰ひ盡して仕舞つたのですから、夫で若し貴君が

茲にお出がないとすればお上に召し上げられて仕舞ンです、左様な
つて誰が喜びます、家はメチャク〜になつて仕舞ひましようし、百
姓などは皆困難しなければなりません、其様事よりは貴君が茲にお
居でなさい、私が命がけで取つて、夫を貴君に差上げるのですから』
と小猫は尻尾を振り立て、怒つた様に云ひました、(十九)
梅之助も斷り兼ねて終に是を承知し忽に大層金持な殿様になつて
仕舞ひました、而して兄さん二人の處へ使をやり、前に不親切にさ
れたにも拘らず夫を許して色々の贈物をしました、夫から王様も度
々遊びにお出になる其内に姫を貰つては呉れないかと御相談をなさ
いました、梅之助はお姫様の美しくもあり極温和しい方であるのを
知つて居ますから厭ではありません、小猫も大層お姫様には感心し
て居るのですが梅之助は小猫にも『私が此様な自分になつたのは虚を

云つたり人を欺す爲めではないのだ』と云つて一度は王様に眞實の話
を仕なければならぬと思ひました、(二十)
夫で王様から結婚の話をいろ〜となさいました時に、梅之助は
『陛下、私はお姫様と御婚禮をする程の身分の者では御座いません、
前には貧しい、粉磨でありました』と申上げました、王様は餘りの意
外に唐場侯爵が發狂でも仕たのではないかと吃驚しながら、詳しく
話して呉れと仰やいました、夫から梅之助は私に皆さんに申上げた
様に是迄の事を残らず御話しました、すると王様は面白がつて息の
出來ない程お笑ひになり、而して『けれども此城も此領分も全くお前
のものに違はなからう、左様ではないか』と仰やいました、『全く、小
猫のお蔭です』左様だ、全く小猫には色々の事を私も教はらねばな
るまいと笑ひながら御褒めになりました、(二十一)

王様は御機嫌よく『では斯様しよう、お前の正直と信實とは神様のお造りになつた眞實の紳士である事を私に現はして居るのだから、私の娘は嫁に上げよう、而して最早昔の事はお互に何事も云はぬ事、私は今からお前を唐場侯爵にする、而して小猫は私の總理大臣にしてやりましよう』と斯う仰やいました、(二十二)

暫くして唐場侯爵は王様のお姫様と御婚禮をし大層楽しく御暮しになりました、而して小猫は猫男爵と云ふ名で總理大臣になり、此總理大臣の治める國程世界に能く治まつた國はないと迄の評判を取りました、(二十三)



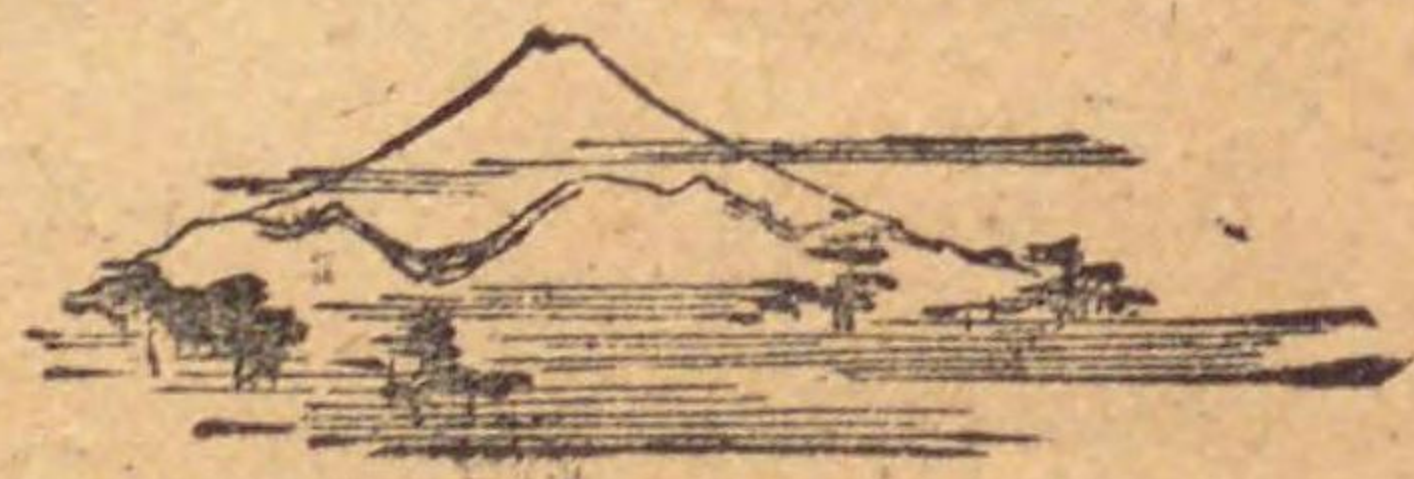
女神は何時でも金貨の十個づゝ出る財布を下さいました

不思議の帽子

(一)

サイプレスと云ふ嶋の或町に大層な金持の紳士が居りました、其
 名を寺田と云ひまして是も嶋中第一の美しい婦人を奥様に貰ひまし
 た、處が此花子と云ふ奥様も大層なお金持でありました、(一)

夫婦とも思ふ通りの美しい家に住み立派な庭を持ちお友達を御馳
 走するにも極上等の飯み物食べ物は勿論、何一つ不足のない様にし
 て居るので自分ながら是程の幸福はないと思つて居りました、まだ



夫ばかりではない一寸外に出るにも是迄に見た事もない程な立派な馬に美しい馬具を付けて乗つて出ますし、餘り熱くない日などは川遊びをと云つて奇麗に彩色した遊び船を漕ぎ出させます、其外に音楽の道具なども何から何まで揃へてあつて一つとして不足はありませんでした、(二)

最一つ御話して置きますが、二人の間には可愛い、男の兒がありました、寺田と花子の二人は世界中で一番大切な一番好きな者は此子一人であらうとは誰にも思はれました、(三)

けれども二人が幸福だと思つて樂で居るのは永くは續きませんでした花子の方は兎も角寺田は長く色々の樂をした後には此可愛い、寶太郎と名を付けた子供供の笑ひ顔も左程には楽しくなく何かもつと此町の華やかな人の仲間に面白い樂みがありはしないかと考へる様

になりました、(四)

夫で寺田は或若い紳士と近付になりました徹夜で酒を飲んだり歌留多をしたりして、僅に半年ばかりの間に身代を無くして仕舞ひ、仕方なしに雇人には暇を出しなどして居りましたが、夫から間もなく家内の者に一片つゝの麵麩を買つてやる事すら出来ない様な身上になりしました、(五)

斯うなつてから寺田は自分の仕た事が悪かつたと氣が付いて大層後悔しましたが、夫は最早間に合ひません、如何しても何か仕事をして家族を養つて行くより外には今まで仕た馬鹿な事の取り返へしを付け様はありませんでした、此様な情けない事になりましたけれども花子は寺田に對して決して不親切な言葉を出しませんばかりか以前の通りに優しく仕へて斯う申しました、「旦那様、私は眞實に何

の商賣もする事を知りませんから、貴君のお金を取る事の御手傳は出来ませんが、其代りには儉約する方で御手傳をします、家の掃除も、麵麩を焼く事も、洗濯も皆私の手一つでやつて見ます、手が其様荒い仕事には馴れて居ませんが、少々辛抱したら出来ましよ、何卒其代り、私と寶太郎を可愛がつて下さいまし、(六)

寺田も此言葉に勢を得て仕事を始めました、花子も今迄は何の用事も一言云ひさへすれば足りたものを籠の掃除から洗濯まで一人でやる事になりました、何時か年が過ぎて寶太郎は十六になりました、(七)

或日親子三人が集まつて御飯を喰べて居る時寺田は寶太郎を見詰めて悲しそうに溜息をしました、『何か心配がありますか、お父さんと寶太郎が心配して尋ねますと、寺田は『あゝ寶太郎よ、私はお前の

成人したのを見るに付け立派な財産を煙の様に無くし、大きくなつたお前にも私と同様家の暮の助をする様働いて貰はなきやアならなと思ふと悲しくもなるではないか』と云ひました、『お父さん、決して其様に心配なさいませぬ、私も最早何か仕事をしてお父さんの手助をしなければならぬかと考へて居たのです、私は仕事を見付けて下さらなくとも、屹度自分で何か捜してやつて見ます』と寶太郎は健

氣な事を云ひました、(八)

寶太郎は食事が済むと帽子を冠つて海岸を散歩しながら、左様何時迄も父母の重荷になつては居られねば何をしたら好いかと思案をして居ました、寶太郎が濱邊へ出て歩いて居る處へフランダ―と云ふ國の殿様が御旅行の歸り路に船で此海岸へ御寄りになつたのが今丁度出帆しやうと云ふ處でした、寶太郎は夫を見て殿様の家來にし

て頂かうと願ひ出しますと、殿様は寶太郎の伶俐をうな顔を見、何か尋ねれば即座にお答をする活潑したのが大層お氣に入つて直に御雇ひ入れになり、寶太郎は其船へ乗り込む事になりました(九)
船は途中ヴェニスと云ふ處へ寄りましたので寶太郎は珍らしい處を見物する事が出来、旅行と云ふ事の面白味と今迄知らなかつた、色々の智慧を得ました、やがてフランダーへ歸ると間もなく寶太郎の御主人の殿様は隣り國のクレーブと云ふ處の殿様の御姫様と御結婚なさる事になりました、其祝ひに五日も六日も續いて槍仕合だの擊劔だの色々の催物がありました、其内の槍仕合には御妃から一つ百圓をする寶石を二つ勝つた者への褒美として下さいました(十)
其寶石の一つは寶太郎が取りました、残りの一つはパーガンデーの殿様の家來である霜平と云ふのが取りましたが、此霜平は寶太郎

をも負かして二つとも寶を取つて仕舞はうと寶太郎に仕合を申込みました、寶太郎は承知をして早速仕合ひしましたが、三度迄は勝負が付かなかつたが、四度目に寶太郎の一突きで霜平は馬から高く突き上げられて仕舞つて寶はあべこべに寶太郎の方へ來て仕舞ひ、主人御夫婦の御褒めにも預り此後は前よりも大切にされる様になりました(十一)
立派に勝負に勝ちましたので寶太郎は御主人御夫婦から御褒め言葉を得たばかりか見物に來て居た紳士方から澤山の立派な頂戴物をしました、けれども寶太郎が斯様な非常な名譽を得た爲に仲間の召使から嫉まれる様になりました、其内の一人露八と云ふのは表面には寶太郎に仲好しの様に見せ掛けて、殿様は非常にお前に親切にして下ださるけれどもお前が餘り槍や擊劔が上手なのを羨むで居ら

れた、而して噂に聞くと明日皆が狩に出て居る間に家來の一人に隙を窺つて寶太郎を殺せと内々の御云ひ付けがあつたそうだと話して聞かせました、寶太郎は露八の云ふ事を眞實だと思ひ其親切を喜で翌日の朝まだ明けぬ内に殿様の廐から一番速い馬を出して夫に乗つて逃げて仕舞ひました、(十二)

殿様は寶太郎が突然自分から姿を匿したとお聞きになりました、家來一同を呼び出して何か事情を知つてるかとお尋ねになりましたが、一同誰も知らぬのみか、如何云ふ譯で居なくなつたらうと議論を始めました、すると殿様は「寶太郎は立派な氣象な男だから決して無斷で逃けるなど、云ふ事はない、屹度誰かに恥かしめられたか欺されたものに違ひないから、其様な事をしたものが分り次第重い罪に處する積りであると云ひ渡されました、(十三)

寶太郎は漸く殿様の領分を走り脱けてから先づ一休み仕様と思つて或宿屋へ這入りました、而して如何程自分に價値があるかを考へ始めました、夫から褒美に貰つた寶石や美しい衣服などを取り出して見、又夫をすつかり身に付けて鏡に向つて姿を寫して眺めると自分ながら中々立派な男に見えます、今度は財布を出して擊劍場に居た紳士や貴婦人から贈られたお金の勘定を見ました、(十四)

先づ五百圓ほどの價値のものがあること分りましたから寶太郎は馬を一匹買ひまして、殿様の廐から乗つて來たのはチャンと返へす様にし、而してカレースと云ふ處を志して出發し海峡を渡つてロンドンへ行き、直きに大變好いお友達と近付きになりました、けれども相手が好いだけに分り切つて居る事ですが、瞬く間に持つて居たお金はすつかり無くして仕舞ひました、(十五)

寶太郎は愈一文もなくつたものですから、フランスへ歸らうと思つて急いで船へ乗り込み無事に上陸はしたものの、如何しても奉公口が見付からないので又ブリタニーへ向かつて旅立ちました、或森の中を歩いて居る内に道に迷よつて仕舞ひ終に來夜は森の中で明さねばならぬ事になりました、(十六)

翌朝になりましたら前の日より好いどころではなく、細道も分らない様になつて仕舞ひ森の中ちう彼方へ往つたり此方へ往つたり夕方まで歩き廻はつて、漸くに見付けたのは一つの泉、大喜びて其水を飲みましたが、食物と云つては丸るでないので飢くつて死にそうになつて仕舞ひました、(十七)

又日が暮れますと野獸の唸り聲が聞へますので寶太郎は心配のない様にと高い樹の上へ登り、やつと腰を卸るすと間もなく泉へは狼

が來て水を飲んで居ます、狼が居なくなつたかと思ふと今度は熊が來て飲で居ましたが、月の光が皎々と照り渡つたので寶太郎の姿を見付けて忽ち寶太郎の登つて居た樹の上へ向つて來ました、(十八)

寶太郎は劍を抜きましたが、靜に坐つて熊が手の届く處へ來るのを待つて居ました、而して近くなつたのを見て幾刀となく斬り付けたので熊は荒れ狂つて唯一掴みに寶太郎を捕まへ様と暴れ廻はつた爲めに樹の枝がビシリと折れ熊は眞逆様に下へ落ち、手足を腕いて打倒れ怖ろしい叫び聲を出しました、(十九)

寶太郎は四邊を見廻はし近くには外に野獸の居ない事を見定めて、今こそ熊を退治する時と思ひまして樹から飛び下りて唯一撃に熊を退治して仕舞ひました、處がお腹が空き切つて居る處ですから最早死にそふな心持がしたので熊の死骸の上へ乗り懸つて其血を吸はふと思

つて、若しや外の獸が來はしまいかと念の爲め脊を振り返へつて見ると驚きました、其處に一人の美しい婦人が目隠をして車の輪に凭り懸り何か物言ひたげにして居りました、(二十)
婦人は寶太郎の言葉を待たず「若者よ、妾が運命の神なる事は知つて居よう、妾は智慧、腕力、富と健康と美と長壽とを何人にも與ふる力を持つて居る、其方にも今其一つを與ふる積りであるが、何を選むか」と云ひました、(二十一)
寶太郎は少しも躊躇せず「難有き神様の仰せ、私には今の様に飢えて苦しい様な事の無い様に澤山の富を頂かせて下さい」と申しました、(二十二)

運命の神様はやがて財布を取り出し、是は何れの國に行かうとも此中へ手さへ入れ、ば必ず金貨が十つ、出る不思議の方を持つて居る、が是はお前とお前の子までは決して變る事はないがお前とお前の子が死んだ後は出なくなるぞよと仰やりながら寶太郎に御渡しになりました、(二十三)

寶太郎は喜で氣も狂ふばかり神様に頻りに御禮を申しますと、神様はお前は今第一に此森を出る事を考へねばなるまい、夫には是々の道を行けと教へて而して姿をお匿しになりました、(二十四)

(二二)

寶太郎は社様の教へのまゝ、月の明りを便に疲れた足の力限りに急いで、漸く森の外の宿屋の傍まで來ましたが、茲で神様のお言葉が眞實か如何かを試して置いた方が慥かだと思つて、先づ財布の中へ手を入れて見ますと、果して金貨が十這入つて居りました、(一)
最早心配する事はないので大膽に宿屋の中へ這入りまして、直ぐ

出来る一番上等の晚餐を誂へ、實は明朝迄待たなければあるまいが、

非常に空腹だから何でも好いのだと云ひました、(二)

寶太郎は忽ちの内に腹一杯に食事をしまして、家に在つただけの

色々の酒を出させて飲みました、夫から偕此後は自分には金が幾許

もあつて何でも仕度い事が出来るのだが、如何云ふ事をして暮らし

たら好からうかと考へ始めました、(三)

其晩は此宿で一番の部屋へ眠り、翌日は有りと有ゆる御馳走を注

文しました、寶太郎が呼鈴を鳴らすと給仕は皆飛んで来て御用を伺

ひますし、宿の亭主は宮様の様なお客が來られたと聞いて部屋から

御出入の時に御辭儀をしなければならんと戸の處へ立ちました、四、

寶太郎は宿の亭主に向つて此近所で良い馬が手に入らうか、又氣

の利いた男の僕で奉公口を捜して居るのはあるまいかと尋ねました

ら、幸にも宿の亭主は二つとも寶太郎の氣に入る様なのを世話しま

した、(五)

入用の物を整へて寶太郎は是迄に見た事もない様な美しい馬に跨

り二人の僕を連れて次の町へ行き、茲で金モールの付いた立派な着

物を買つて僕に着せ而して巴里へ向けて出發しました、(六)

巴里へ着いてから一番立派な家を買ひ、茲で華やかな暮しを始め

ました、貴族を招待して御馳走し、宮中の貴婦人などを招いでは立

派な舞踏會などをやりますし、方々の會には招かれ、巴里第一番の

貴族とは別懇にして毎日の様に遊びに行つてました、(七)

此様にして寶太郎は一年ばかり暮しましたが、サイプラスの嶋に

残つて極貧乏して暮らして居る父母を尋ね様と思ひ立ちました、併、

私は年も若し、何にも知らないんだから誰か私より伶俐な人を同道

して、此旅行を爲めにもなり楽しみにもなる様にしたい」と考へまし
た、(八)

寶太郎が搜して居ると間もなく鹿堂と云ふ尊敬すべき老紳士に逢
ひました、此人は蘇格蘭の人で家に妻と子供十人を残して身代を能
くしようとして居るのでありますが、色々變つて災難の爲めに昔よ
り却て貧しくなりて國へ歸る事すらも出来ない様になつて居るので
した、(九)

鹿堂は寶太郎が智恵を求めぬのに一生懸命であるのを知つて、自
分が出逢つて様々の冒險談や、嘗て居つて國々の模様、其國の人の
風俗から習慣までを詳しく話して聞かせました、(十)

寶太郎は「是人こそ自分の搜して居る最も好い人に違いないと考へ
まして、大層好い約束で雇はれては呉れまいかと相談しますと、鹿

堂も大喜び、一番先へ自分の國へ往つて自分の家族を尋ね來ても好
ければお伴しよう」と云ふ事に極まりました、(十一)

寶太郎は其様事は一向差支がないと承知しまして「而して、私も誰
も知つてゐる通り巴里の此騒しい町中に暮らして居るのも實に飽きた
から、私も一所に蘇格蘭まで往つてお前の妻君や子供達に逢ひまし
よう」と云ひました、(十二)

二人は早速仕度をして翌日出發し間もなく鹿堂の家へ着きました、
寶太郎は華美な招待や宴會から逃げ出して親切な友達と旅行するの
が何より愉快でありました、鹿堂は妻や子を抱き上げて喜びました、
子供のうち五人は娘で、夫が又類稀なる美人でありました、食事が
濟むと鹿堂の妻君は夫に向つて今日は思ひ掛もなくお目に懸れて如
何程嬉しいでしょう、何卒是からは年も老つて先は短かいのですか

ら一所に楽しく暮す事にして下さい、假令貧しくとも私共は是で満足して居ますから、貴君も爵位だけで我慢して最早金儲などにお出懸なさらぬ様に」と云ひました、(十三)

寶太郎はチツと聞いて居て驚きました、『おや、貴君は貴族なのでしたか、宜しい夫では私が金持の貴族にして上げましょう、いや決して私が財産を上げるからと云つて私に迷惑を掛けた様には思はずに居て下さい、夫よりは私の方から私が貴君から澤山借財をして居る様にしましょう、而して私に貴君の娘さんの桂子さんを下さい、皆家中揃つてサイブラスの私の故郷まで来て下さい、左様すれば貴君もゆつくり休んで今度歸る時に楽しく歸る事が出来ましょう』と云ひました、(十四)

鹿堂伯爵は涙を溢して喜ばれ、自分の望む通りの幸になつたのを

考へて直様寶太郎の言葉通り桂子と縁組をさせる事を承知し、自分は巴里でも非常な不幸にばかり出逢つて憐れな生活をして居た爲めに態と爵位は名乗らなかつたのであると話しました、(十五)

愈々家族一同で出發すると云ふ事になつたのは凡ての仕度が悉く出来上つてからで、寶太郎、鹿堂伯爵と子供十人は立派な船に乗り込で出帆しました、風の都合も極く好かつたので日ならずして一同楽しく寶太郎の故郷の地へ上陸しました、(十六)

寶太郎は上陸するや否や両親を尋ねた處が父も母も既に死んで居りません、其處で鹿堂夫婦に頼んで居て貰ふ事にして立派な家に住ひ盛な御馳走をして町中の人を招きました、其年の終りに桂子は安郎と云ふ子をうみ、又翌年逸郎と云ふのを産みました、(十七) 夫から十二年間と云ふもの寶太郎は妻子と共に最も幸ひな暮しを

して妻の妹達は皆澤山の財産を分けられ、兄弟は皆好い處から嫁を貫ひなどしました、處が寶太郎の旅行好きは又急に崩して来て、自分も以前巴里に居た時分よりは年も老つたし、智慧も出来たから、鹿堂伯爵が到底旅行の出来ない程に年老つては居るし一人で澤山だと思ひました、(十八)

桂子の承知しないのを色々に説得して漸く二年だけと云ふ約束で承知させ旅行の仕度萬端を整へた上で、桂子を自分の部屋に呼び寄せ金貨の一杯に詰まつて居る行李を三つ渡し一つは桂子、二つは子供二人の爲めに何事か起つた時の用意であると言つて渡し家族一同に別れを告げて順風に乗じて埃及のアレキサンドリアに向ひました、

(十九)

寶太郎はアレキサンドリアに着くと土地の人から茲へ来た人は國

王に何か贈物をする例になつて居ると聞きました五千圓もする金の皿を献上しました、處が國王は大層お喜びになりました、返禮として百樽ほどの香料を下さいました、寶太郎は早速夫を自分の乗つて来た船で直く又サイプラスへ歸るのに積ませ優しい手紙を添へて妻の桂子に贈りました、(二十)

寶太郎は埃及の國王に折を見て埃及中を旅行したいと願ひ出てました處王は早速に御許になり何事かあつた時には何處へでも願つて困る事のない様にと旅行免狀に添へる各所々の王様に宛てた手紙を下さいました、其處で寶太郎は駱駝を一つ頭買ひ事に馴れた従者を一人雇つて旅立ちました、第一に土耳其、彼斯、夫からカルセーデへ行き歸りには道をセルサレムに取つて又アレキサンドリアに戻つて來ますと、先に乗つて來た船が丁度來て居つて、家族は皆無事

である事を船長から聞きました、(二十二)
寶太郎は戻るなり第一に古いお友達である國王へお目に懸り又お
土産として献上物を致しましたので王様はお喜びになりました奥へ
通して御馳走をなさいました、食事が済むと國王は寶太郎に向つて
お前の様に方々旅行して歩くのは非常に面白い事に違いない、何卒
其話を聞かしては呉れまいかと仰やいましたので、寶太郎は御言葉
に従ひますと、王様は大層喜び熱心に御聞き取りがありました、(二十三)
話が済むと王様はお蔭で大層面白い思ひをしたと禮を仰やり、寶
太郎が話よりも最不思議な話があると仰やつて、御自分から寶太郎
を案内して寶物の這入つて居る部屋へ御連れになり大きい箱を開け
て一つの帽子をお取り出しになりました、そして是が此部屋中の外
のものよりも一番に價值があるのだと御仰いました、(三十三)

寶太郎は國王が冗談を云はれて居ると思ひ是よりも好い帽子を澤
山に見た事が御座いますと申上げると、『あゝ、夫はお前が此帽子の
價值を知らないからだ、誰でも此帽子を冠つて行き度いと思ふと、
其人は世界中の何處へでもばツと一分間に連れて行かれるのだ』と國
王は仰やいました、『眞實で御座いますか、而して其帽子を拵へた人
は生きて居りますか』と寶太郎が驚いて伺ひますと、『其様事は何にも
知らない』と御答になる、『全く誰だつて眞實に其様な事が出来ると思
ふ者はありませんでしよう、して其帽子は重う御座いますか』と寶太
郎は又伺ひました、すると『其様に重くはない、まア冠つて御覽』と仰
やつたので、寶太郎は冠りながら故郷へ歸る船の今出帆しかゝつて
居る處へ行き度いと思はずには居られませんでした、(二十四)
すると瞬く間に寶太郎は風に吹き飛ばされたかと思ふ様な氣がし

て、チャンと今出帆しやうと云ふ船の甲板に立つて居りました、丁度追手の風が劇しかったので僅に三十分も経たない内、寶太郎を載せた船はアレキサンドリアからは影も見へなくなりました、船は無事に故郷へ着き、寶太郎は妻子の無事な顔を見ましたが、鹿堂伯爵夫婦だけは老病で没くなり並で墓の下に埋められて居りました、二十五寶太郎は今度は家に居て二人の子供の教育をするのを大層楽しみにして槍や擊劔や相撲など勇ましい稽古を毎日させて居りました、けれども寶太郎は不思議な帽子の手に這入つた事を考へ出しては幾度もくまだ知らない國々へ行き度いと思ひます、すると必ず一分間よりも早く望みの處へ行かれるのであります、長くは居らず一二時間遊では歸つて來るので妻の桂子も少しも氣が付かず、夫に旅行の道樂がなくなつて安心だと喜で居りました、(二十六)

何時か寶太郎も大層年寄になり妻の桂子は是も年寄つて病氣に罹つて死にました、妻の死んだ悲みは年寄つた寶太郎の體に障りました、間もなく病の床に就き、自分では最早長くは生きられまいと思つたので二人の子供を枕邊へ呼んで、帽子と財布の話聞かせ決して人に此秘密を漏らしてはならぬ、「私は四十年の間誰にも話さない、夫で今の財産に就いても誰も何にも知らないのだから、其通りに仕なければならぬぞと誠めて、夫から財布の用ひ方を説明し、吳々も二人は仲好く暮らさねばならぬと遺言して、間もなく遂に死にました、寶太郎の死骸は桂子の墓の側に埋められ、島中の人から長い間悲しまれ惜まれて居りました、(二十七)

(三三)

寶太郎が死んでから間もなく弟の逸郎は兄であるからして財布を

を譲られた安郎の處へ参りまして、遠方の國へ旅行に行き度いから暫くの間財布を貸して呉れと頼みました、兄の安郎は容易には承知せず、色々相談の上六年間逸郎が持つ事にしまして、兄は家中の在りとあらゆる箱の中に金貨を一杯に出しては詰めた上に、六年の後には兄が一生持つ事として逸郎の手に渡しました、(二)

弟の逸郎は父の旅行好きの性質を受け継いだものと見へまして、財布を受取つて雀躍して大喜び、直に巴里へ出掛けました、巴里に其頃鬼の腕と名を取つて未だ誰にも負けた事がないと云ふ有名な相撲取りが居りました、逸郎は直に此鬼の腕に向つて勝負をしようと云つてやりますと先方は快よく承知し取組の日も極まりました、忽ち此事が巴里中へ知れ渡り誰も彼も是非此勝負は見たいと騒いで居りました、(三)

兩力士は定められた場所を急取組をする事になりました、けれども鬼の腕は逸郎ほどに上手でありませんで、二突三突、突き合ふ内に鬼の腕は突き負けて泣き出して仕舞ひました、併鬼の腕の逸郎に突かれた痛み所はちぎに癒りましたので、田舎者に負けた口惜しさから考もなく又勝負をしようとして逸郎へ申込み以前の通りに相撲ひました、けれども二度目の勝負も鬼の腕には何の甲斐もなく逸郎の爲めに突きまくられて『最早澤山だ』と叫ぶまでの負をして仕舞ひ、見物の群集が逸郎を褒める聲は實に響くばかりでした、鬼の腕は是迄の評判も全く地に落ちて仕舞つて、詮方なく今後相撲には關係しない事になりました、(四)

身に餘る名譽を荷つて逸郎は暫く巴里に居りましたが、評判は忽ち英國にまで聞え、折柄蘇格蘭の王と戦争中の英國王から是非ロン

ドンへ来て軍隊を持揮する相談役になつて呉れと頼んで來られました、逸郎は喜で此頼みを引受けましたのは蘇格蘭の王様と云ふのは祖父に當る鹿堂伯爵の領地を奪ひ財産を奪ひ伯爵が仕方なく巴里へ行く様な事にした悪い人であつたからです、(四)

旅の仕度もそこへ、ロンドンへ着きますと王様を始め一同から非常の歓迎を受けました、逸郎は直様蘇格蘭の王に怨みのある事を申し上げ、英國兵の選抜した精兵の一軍の大將となる許を受けて戰場へ進みました、忽に蘇格蘭へ攻め入つて王と劇しい戦をしまして大勝利を獲てロンドンへ歸つて來ましたので英國では第一番の名譽ある勳章を贈つて其功勞に報ひました、(五)

逸郎はロンドンの町に立派な家を構へ王様始め貴族などを幾度も招待しては非常な御馳走をするので、王様は如何して斯様に莫大な

金を逸郎が持つてゐるだらうかと疑ひ始めました、(六)

或日逸郎は宮中へ伺候して居りました、王女の雛子姫と云ふ方にお目に掛りましたので歸ると早速大層な價値の品物を御使ひ物に差上げました處が、王様や御妃は愈々逸郎が如何して斯様に澤山のお金を持つてゐるかい不思議だと怪しむで居られました、(七)

で御妃は是には何か秘密があるに違ひないからと云ふので御自身調べ様となさいまして王女の雛子姫にも話し若し逸郎が來たら必ず其秘密を探し出す様にと御吩咐になりました、間もなく逸郎は宮中へ出まして、丁度雛子姫にお目に懸り、貴女は實にお美しい方であるが、如何したらば私と結婚して下さるか伺ひました、雛子姫は是こそ逸郎の秘密を探し出すに屈竟の機だと考へて、妾も貴君のお嫁になり度い事は山々であるが王女を妻にして夫を世話をして行

くにはお金（かね）が足り（たり）ますまいと答（こた）へました、（八）
是（こゝろ）を聞（き）くと逸郎（いちろう）は彼（か）の不思議（ふしぎ）の財布（さいふ）を取（と）り出（だ）して、忽（たちま）ち金貨（きんが）十（じゅう）を
掴（つか）み出（だ）し是（こゝろ）を雛子（ひなこ）姫（ひめ）の膝（ひざ）の上（うへ）へ投（な）げ出（だ）し、是（こゝろ）は斯（う）やくで父（ちち）の手（て）に這（はい）入（い）
りましたもの（もの）でと色（いろ）々（く）々（く）しいお話（はなし）を致（いた）しました、（九）
雛子（ひなこ）姫（ひめ）は此（この）話（はなし）を聞（き）くなり直（す）に母（はは）君（きみ）の妃（きさき）に悉（し）皆（かい）と話（はなし）しましたので、
妃（きさき）は逸郎（いちろう）を大層（たいそう）氣（き）に入（い）つてゐるらしく待（まち）過（た）し、自（じ）分（ぶん）の立（た）派（ぱ）な部（べ）屋（や）に通（と）
し一（い）杯（ぱい）の強（つよ）い酒（しゅ）を飲（の）ませました、夫（それ）には直（す）ぐ眠（ね）つて仕舞（しま）ふ薬（くすり）が入（い）れ
てあつたので、逸郎（いちろう）は呑（の）むか呑（の）まないに、ぐつぐつと前（ぜん）後（ご）も知（し）ら
ず眠（ね）むつて仕舞（しま）ひました、妃（きさき）は逸郎（いちろう）の懐（ふところ）へ手（て）を入（い）れて財（さい）布（ふ）を出（だ）し、
而（そ）して逸郎（いちろう）を屋敷（やしき）へ送（おく）り届（とど）けて仕舞（しま）ひました、財（さい）布（ふ）は妃（きさき）から雛子（ひなこ）姫（ひめ）
にお前（まへ）の力（ちから）で取（と）る事（こと）が出（で）來（き）たのであるから、お前（まへ）の物（もの）にするが好（よ）い
と云（い）つて渡（わた）されました、（十）

逸郎（いちろう）は目（め）が覺（さ）めて、財（さい）布（ふ）の無（な）いのに氣（き）の付（つ）いた時（とき）に狂（ま）の樣（やう）に驚（おどろ）
まして、如（ど）何（なに）して好（よ）いか分（わ）らなず家（うち）の内（うち）外（そと）を駈（か）け廻（まわ）はつたりしまし
たが、漸（や）やくに宮中（みやうち）での事（こと）を思（おも）ひ出（だ）し、早（ま）速（そく）宮中（みやうち）へ參（ま）内（ない）して妃（きさき）にお目（め）
に懸（か）つて伺（うかが）ひ度（た）いと願（ねが）ひましたが、逢（あ）ふ事（こと）は出（で）來（き）ないと云（い）ふ御（ご）返（へん）事（じ）、
ではお姫（ひめ）様（さま）にと願（ねが）ひましたが、是（こゝろ）も差（さ）支（し）がある（ある）と云（い）ふ御（ご）返（へん）事（じ）でした、
夫（それ）で逸郎（いちろう）は財（さい）布（ふ）は妃（きさき）が取（と）つて返（か）しては呉（く）れない積（つ）りだと云（い）ふ事（こと）が分（わ）
りました、逸郎（いちろう）は色（いろ）々（く）々（く）考（かん）へた末（すえ）に自（じ）分（ぶん）の雇（や）つて居（ゐ）る料（りょう）理（り）人（にん）から金（きん）壹（いち）
百（ひゃく）圓（えん）借（か）りて出（で）來（き）る丈（だけ）急（いそ）いで故郷（こきやう）へ殖（か）り、何（なん）處（ところ）へでも思（おも）ふ處（ところ）へ行（い）かれ
る帽（ぼう）子（し）を一（い）寸（すん）の間（ま）兄（あに）から無（む）理（り）やりに借（か）りる事（こと）にしました、（十一）
漸（や）やくに借（か）りる事（こと）になりまして、逸郎（いちろう）は夫（それ）を冠（かむ）るなり、妃（きさき）から財（さい）布（ふ）
を取（と）り戻（もど）す相（さ）談（だん）をすゝめ雛子（ひなこ）姫（ひめ）の部（べ）屋（や）へ行（い）かうと望（のぞ）みました、
忽（たちま）ち姫（ひめ）の部（べ）屋（や）に行（い）つて見（み）ると財（さい）布（ふ）は姫（ひめ）の帯（おび）に確（しつ）か縫（ぬ）ひ付（つ）けてありま

す、返へして下さいと頼みましたけれども、姫が承知しないので突
然姫を抱き上げてコンスタンチノールの傍の菓物畑へ行き度ひと
望みました、(十三)

望は直に叶へられて逸郎は姫を抱いた儘に大きい無花果の樹の下
に立ちました、處が雛子姫が無花果を一つ食べ度ひと云ふものです
から、逸郎は姫を憎んでは居ないので、親切にも帽子を脱いで樹へ
上つて無花果を取らうとしました、(十三)

雛子姫は帽子の事は何にも知らないのですが日に照らされて熱く
て堪らないので、逸郎の脱いだ帽子を冠りました、其時に不圖父上
の宮殿の冷水浴がしたいと思ひ浮んだので、不思議の帽子は忽に雛
子姫を飛ばして雲の中に見へなくなつて仕舞ひました(十四)
逸郎は四邊を見廻はして姫も帽子も無くなつたのを見て、餘りに

自分の油断が大き過ぎたのに驚き今更如何したら好いか分らなくなつ
て仕舞ひました、けれども暫くの間夢中に歩き廻はつてる内に大層
咽喉が渴いて來たので其處にあつた林檎の樹から二つ三つ實を取つ
て喰べました、すると逸郎の額際から太い二本の角がニヨキ〜と
生へました、(十五)

郎は驚くまい事か、狂氣の様に叫びながら菓物畑の中を走り廻
はつて居ますと、其聲を聞き付けた一人の老人が出て來まして、何
事が起つたかと尋ねました、すると老人は外の樹の林檎を取つて喰
べさへすれば角は屹度無くなつて仕舞ふから心配には及ばないと教
へて呉れました、(十六)

逸郎は教へられた通りにしましたら、果して角は無くなりました、
夫から逸郎は此不思議な林檎を兩方とも幾個も懐に入れて歩いて雛

子姫の住んで居る王城へ志して歩いて行きました、而して英國には珍らしい林檎を賣る麗いな果物屋の風をして門の傍に立ちました、十七丁度通り掛られた雛子姫は此珍らしい林檎を見て、コンスタンチノープルで見た林檎に違ひないと思つて買ひ求め早く喰べ様と云ふので急いで城の中へ御歸りになりました、雛子姫が夫を喰べると忽ちに二本の角がニヨキくと生へたので大聲を揚げて叫びました、其聲に驚いて王様も、妃も宮中の人が皆驚いて駆け集まり雛子姫を助け起し、角の生へて居るのに驚いて急いで醫者と云ふ醫者を呼び集めて診せましたが、誰にも是は手が付けられませんでした、(十八)最後に逸郎は大きい付け鼻をして醫者の風をしてお城へ参りました療治をしようと王様に願ひますと喜で御許しになり、雛子姫の部屋に通されました、見ると自分の大切の帽子が椅子の上に投げ出し

てあります、其處で療治には外の人居ては具合が悪いと云つて侍婢を部屋から出させ、其間に帽子を取つて懐へ入れて仕舞ひました、(十九)夫から自分が賣つた林檎の爲めに出来た角を無くす爲めに好い方の林檎を出して大層小さく切つて是をお喰りなさいと云つて出しました、姫は云はれる儘に夫を喰べると角は瞬く間に小さくなりました、(二十)雛子姫は大層喜び澤山の禮金を此醫者に與らなければならぬと思つて腰の財布から金を取り出そうとした時、突然夫を引奪り帽子を叩きながらサイブラスの故郷へと願ひますと、忽ちに逸郎は家へ歸つて仕舞ひました、けれども逸郎は姫の角の全然取れる程には林檎を喰べさせなかつたのですから、雛子姫の額には角が僅ながら残

つて居りました、(二十一)
家へ歸つて逸郎は詳しい話を兄の安郎に仕ますと、安郎は其様に
持主に災難を惹起す様ならば私は最早要らないからと云つて帽子も
財布も逸郎に考へ其代りには安郎の一生年々金を贈る事に約束しま
した、逸郎は限りの無い金庫もあるし何處へでも行かれる帽子もあ
るが、まだ十分に幸福ではないと思つてました、(二十二)
で如何かして雛子姫を妻にしたい、外には別に望もないと考へま
して、第一番に立派な宮殿を建る事に掛りました、而して時々例の
帽子を冠つてはロンドンの王宮へ行き馬車に乗つて散歩などして居
る姫の顔を見ては角のまだ残つてる事を確かめて居りました、(二十三)
宮殿が愈々出来ると逸郎は何とも云はれない立派な行列を揃へて
家の近所の立派な人々をも同伴して豪い貴族の様に見せ懸けて、雛

子姫には殊更に貴重い寶石の贈物を用意して英國へ赴きまして、公
然に雛子姫に結婚を申込みました、(二十四)
英國の王様は大層鄭重に逸郎を待遇しました、妃も亦姫には額に
角があるから何處の王様も公子も結婚を申込んでは呉れまいし、さ
りとして逸郎から財布を取り上げると云ふ事も出来ないで終に承知
をしました、雛子姫も前から逸郎を嫌いではない、御言葉は實に嬉
しう御座います、悲しい事に額に角のある内は結婚し度くも出来
ませんと云ひました、(二十五)
『雛子姫、夫では最早私の願ひも叶ひました、私は貴女の角を直に
取り去る力を持つて居ります』と逸郎は云ひながら部屋を出たかと思
ふと、前に姫に少し喰べさせたと同じ林檎を持つて來まして、夫を
チャンと喰べられる様にして姫に薦めながら、前に貴好の角を小さ

くした醫者も私ですよと知らせました、(二六六)
雛子姫は驚くやら喜ぶやら、逸郎の薦める林檎を喰べ始めると角
は全く消へて痕もなくなつた、其處で其日早速婚禮して日ならず出
發して故郷へ歸り非常な歓迎を受けて宮殿へ戻りまして夫婦とも樂
しく長生をして暮らしました、逸郎は帽子も財布も小さい箱に仕舞
つて嚴重に鍵をし又何事か起るといけないと云ふので鍵は人手にも
渡さず大切に自分で持つて居たそうです、(二七七)



弓を探つて覗ひを定めてトンと射つた

金髮美人

(二)

昔、或王様のお姫様で世界に並ぶ者の無い程美しい方がありまし
 た、餘りに勝れて美しいばかりか其髪の毛は研ぎ上げた金よりも光
 つて居て、而して美しい浪を打つて首から足の邊まで垂れ下がつて
 居るので誰云ふとなく金髮美人と云ふ名が付きました、お姫様はい
 つも浪を打つた髪の上に花で作つた冠を着けて金剛石や真球を刺繡
 にした衣服を着て居られますので誰でもお姫様を見た者は見惚れず



には居られませんでした、(一)
隣の國を治めて居る若い王様はお金も澤山にあり、而して立派な
方でまだ獨身で居られました、此噂を聞いて見た事もないのに是非
嫁に貰ひ度いと云ふので公使を出張させて結婚を申込む事に極ま
りました、而して其公使を載せる爲めに實に美事な馬車を拵へ百人
より多くの従者と馬とを與へまして命がけで是非金髪美人を貰つて
来いと命じました、(二)

公使は王様に御別れを告げて直様出發しました、王様は必ず思ひ
通りになる事と疑ひもしないので金髪美人を迎へる爲めにと云ふの
で美しい衣服だの道具だのと色々の仕度をなさいました、夫だもの
です、から宮中では唯もう金髪美人の事ばかりを誰も話し合ひ噂し合
つて居りました、仕度の爲めに忙しい大工などの用事がまだ濟まな

い内に公使はもう金髮美人のお屋敷へ着いて來意を述べました、處
がお姫様は此日に限つて御機嫌が悪かつたのか又は此申込がお氣に
入らなかつたか、公使に向つて王様の思召は誠に難有いが、婚禮は
仕度ないとお返辭をなさいました、(三)

金髮美人をお伴して歸る筈であつた公使は、お姫様が賢くつて贈
り物を受取つては斷はる事が出来ないといつもお受取りなさらなか
つた爲めに持つて往つた贈物を其儘従者に擔がして悄然としてお屋
敷を出しました、(四)

公使は王様の町へ戻りますと、王様は待ち兼ねて居られましたの
で、お姫様を連れずに歸つた人々は何とも面目もなく、詳しい話を
申上げますと、王様は子供の様に泣き出してお仕舞ひなすつて、近
侍の人々が如何に慰めてもお聞き入れはありませんでした、(五)

此時に宮中へ仕へる美しい若者がありました、此國中で第一番の美しい若者で禮儀も正しく如才のない名を内藏之助と云ふ者でした、王様のお氣に入りで特別の扱ひを下さるのみならず内所の事まで相談なさるのを口惜しがるものは嫉みもしましたが、其外の者は皆可愛がつて居りました、或日内藏之助は友人と一所に公使が戻つた事に就いて話をして居りました、公使が何の効能もなしで戻つたのは残念だと或人の話すのを聞きました、何の考へもなしで『王様が私を金髪美人の迎へにお遣りなさりさへすれば、私は屹度連れて歸つたんだ』と云ひました、すると一坐の中に内藏之助を嫉む者がありました、早速宮中へ参り王様に向つて『閣下は内藏之助の言葉を何とお聞きになりませうか、彼は閣下が自分を使に御出しになれば必ず金髪美人を儲に連れて歸つたと申します、誠に用もない言を彼は申すでは

御坐いませんか、屹度彼れの心中では自分は閣下より美しいから金髪美人に逢ひますれば氣に入られて世界の何處までも同道して來る事が出來ると云ふ考へで御座いましょう』と頻りに惡ざまに申しました、是を聞いた王様は怒るまい事か、全く別人の様に立腹しました、『何だと、一方ならぬ寵愛を與へてやるのに憚りもなく私の不幸を笑ふと云ひ、其上自分の身を私に引較べて惡ざまに云ふとは、奇怪な奴だ、直様圓塔へ入れて食物を與へずに飢死させて仕舞へ』と仰やいました、(六)

王様の近衛兵は直に内藏之助を捕縛しました、自分の云つた言葉が罪になつたとも心付かない内藏之助は牢屋へ投げ込まれ散々に罵られ辱められました、圓い塔の中には寢床としては僅ばかりの藁がある許です、内藏之助は如何せ死ぬとは思ひながらも塔の根方の處

に小さい泉の湧いて居るのを見付け、お腹が空き切つて咽喉が乾いて堪らないので其水を飲んで一息しました、或日内藏之助は全く弱り果て、深い溜息を吐きながら、「如何したら王様に誰へる事が出来様か、王様には確に私より外には心から誠を盡す家來はない筈だ、私は王様に不忠義であつたらうか、いや決して、其様な事をした事はない」と細い聲で嘆いて居る處へ、丁度通り懸られた王様は自分の氣に入りの家來の聲が耳に入つたので立止つて耳を濟して聞かとなされました處が御傍に隨いて居たのは内藏之助を嫌て居る者でしたから、「陛下何事で御座いますか、彼を悪人とは思召しませんか」と申し上げました、すると王様は「静にしる、何を云つてるか聞き度いのだから」と仰やつて内藏之助の獨語での訴へをお聞きになつて可愛そうに思つて涙を溢され直様戸を開いてお呼出しになりました、内

藏之助は哀な姿でよろ／＼と出て來ましたが、王様の前へ打倒れ王様の膝に縋り付いて云ひました、閣下、私が何をしました、此様に重い仕置になさるのは、『お前は私と公使とを悪く云つたではないか、而して自分が使に行きさへしたら金髮美人を連れて來たのにと云つたではないか、お前は慥に姫を連れて來る事が出来るのか』との王様のお言葉に『夫は實際です、陛下、私は屹度金髮美人に陛下のお話を詳しく申し上げて断はる事の出来ない様に仕てお連れ申しませう、其外には決して閣下のお氣に障る様な事を云つた筈はありません』と内藏之助は答へました、王様も自分のお氣に入りの内藏之助が悪いのでなかつた事が御分りになつたのでお傍に居た讒言をした者を怒つた顔で睨みながら、誠に悪い事をしたと後悔されて内藏之助の手を取つて扶け起されました、(七)

晩餐を召上つてから王様は自分の部屋に内藏之助を呼び寄せ、「内藏之助よ、私は今も尙金髪美人を忘れたのではない、断はられたのが残念で堪らないのである、けれども如何勧めたら金髪美人が結婚を承諾するか分らないので困つて居るのであるから、お前を使者にやつてお前の云ふ通り出来るか出来ないかを試めして見たいと思ふんだ」と仰やると内藏之助は何事も王様の仰せには背かぬ明日直に出発しようとして申上げました、「では立派に供揃を仕て行け」と王様の仰やるのを「いや夫は要りません、唯良い馬一匹と陛下の御申付とを頂いて参りました」と願ひました、(八)

内藏之助が王様を始め知り人に分れて使に出發したのは月曜日の朝でした、内藏之助の心は如何したら金髪美人に用向を傳へる事が出来様かと云ふ事ばかりに充ちて居ました、懐には覺え帳を持つて

居りました、挨拶の時の言葉に用ひる好い考が浮んで来た時には馬から飛び降りて樹の下に座つて帳面に記して忘れない様にして居ました、或朝早く宿屋を出掛けまして大きい牧場を通り掛つて居る時に不圖大變好い考が浮びました、其處で馬から降りて牧場の傍を流れて居る小流れの岸に生へて居る柳の樹の下に坐つて、考へた事を帳面に記して四邊を見廻はすと中々好い景色でありますから暫くは方々眺めて楽しんで居ました、其内にひよいと草の上を見ると金色をした大きい鯉が息も切れなくに苦しんで居ます、多分小さい蠅を呑もうとして餘り勢よく飛び上つた爲めに草の中へ落ちて仕舞つて最早死に懸つて居るのでしよう、内藏之助は不幸な鯉を憫に思ひ、晝の食事に取つて置いて好いのを静に流れの中へ放してやりまして、すると鯉は新らしい水を吸つたか喜んで底の方へ潜ぐつて行き

ましたがやがて樂しそうに岸の方に泳ぎ出して来て、『内藏之助さん、貴君の今の親切は何より難有い事です、貴君の爲め此御親切の爲めに私は死ぬ事にします、命懸けで屹度御禮を致しますよ』と云つて又水庭へ沈んで行きました、内藏之助は鯉が義理堅い事を上手な言葉で云つたので呆れ返へつて茫然して仕舞ひました、(九)

翌日又旅を續けて行きますと今度は酷い目に逢つて居る鳥を見付けました、憐な鳥は鷺に追ひ蒐けられて今、進退谷まつて内藏之助が救けなければ豆か何ぞの様に一呑にされようとして居るのです、此の通り強い者が強い者を虐めるのだ、鷺に如何して鳥を取つて喰ふ理屈があるんだらう』と云ひながら、何時も持つて居る弓を取り直して矢を番へて覗ひを付けながらトンと放しました、矢は見事に鷺の体の中つてブツ／＼に其体を貫ぬいたので眞逆に地上に落ちて死

にました、鳥は夢中になつてやつと樹の枝へ止まりながら、『内藏之助さん、貴君の救けて下さつたのは何ともお禮の言葉もありません、私は憐れな鳥一羽ではあります、恩は知つてますから必ず御禮は致します』と云ひました、(十)

内藏之助は鳥の言葉を感じて褒めながら道を急いで行きました、翌日は森の中へ這入つて往きますと朝あまり早かつたので道が分らないで困つて居りますと、梟の鳴聲が聞えました、夫も苦しんで居る様な聲でしたから『おやく、あの梟は大變悲しい聲をする、屹度蹄にでも掛つたのである』と云ひながら其周圍を捜して見ますと、獵師が小さい鳥を取らうとして掛けて置いたらしい大きい網が見付かりました、『お、可愛そうに、人は人同士で苦しめ合つてる許か罪も無い鳥まで苦めようとして居る』と云ひながら劍を抜いて網の縛は

つてある綱を切ると梟はばた／＼と飛び出しました、がやがて戻つて来て羽を延ばしながら樹の枝へ止まつて、『内藏之助さん、私が貴君のお蔭で救かつたお禮をする事を貴君に申上げるにも及びますまい、が今直きに獵師か來るので貴君の救がなければ私は死ぬ處でし
た必ず御禮は致しますよ』と云ひました、(十二)
内藏之助は其旅行の間に三つの好い事を致しました、けれども自分の役目をするのが急がしいのでありますから、少しも時間を無駄にせず金髪美人のお屋敷に向つて急いで行きました、金剛石も普通の石塊の様に／＼とし美しい衣服、甘い食物、銀の道具類、何れ一つ人の慾しがない物はないのに其立派な贈り物を受けずに返へされたのであるから、今若金髪美人が贈物なしで自分の主人の王様と御婚禮なさる事になれば、自分の役目を成し遂げるにも非常

に張合はあると思ひました、内藏之助は立派な錦の衣服を着、肉色と白との羽を飾つた冠を着け、顔は洗ひ髪は梳ぶり刺繡をした肩掛を掛けて、小さい奇麗な犬を買つて籠に入れて持ちました、内藏之助は實に奇麗になりました、而して御屋敷の御門へ着きました時に門番が皆驚いて敬禮をし、直に金髪美人へ隣國の王様の使者内藏之助と云ふ者がお目見得を願ひ出でました取次から申上げました、(十二)

(三)

金髪美人は内藏之助の名を聞いて『私は其名が大層氣に入つた、而して屹度奇麗で、誰にでも好かれる様な者に違いない』と云ふと、『よく其通りです、私どもは貴女の麻を編んで居りました時に倉の二階の窓から見まして、何時迄も見へるので、遂仕事が遅くなつた位で

御坐います』と侍婢は云ひました、『夫では餘程奇麗だと見へるね、サア縫ひのある青い縞子の上衣を持つて来て下さい 而して私の髪を、可憐に結んで簪にするから新らしい花を、夫から高い靴と扇と、而して應接の間や私の椅子を奇麗に掃除して、私は其使の者に何處から何處まで流石に金髪美人と感心させて遣りたいのだから』と云ひ付けました、(一)

大勢の侍婢はお姫様を立派に飾り立てるのに掛りました、大急ぎにやつて居るのですけれども大勢だからお互に邪魔になつて容易には出来上りませんでした、やつと出来上ると今度はお姫様が鏡の前に立つて何處か不足の處はないかと眺めて見て、愈々好いとなつてから、金や象牙で拵へた立派な椅子へ腰を懸け、而して侍婢を呼んで音楽を始めさせる、と忽に美妙的な音楽と歌の聲とが聞えました、

けれども使者を驚かすといけないと態と低い調子でありました、(二) 内藏之助はお目見得の室へ通りました、すると輝くばかりの立派な處へ、金髪美人の美しさ、流石の内藏之助もドギマギして暫くは言葉も出ませんでしたが、やつと勇氣を起して道々考へて置いた通り役目の口上を實に立派に述べ立てました、是でも金髪のお姫様も此使者に對しても氣の毒で獨りは歸へされないだらうと思はれる程でした、『優しき使の人よ、其方の言葉は悉く氣に入りました、外のこと事であるなら其方の言葉に従ふ事を私も喜ぶのであるけれども、聞いて貰はねばならぬのは、一ヶ月あまり前、侍婢と川岸を一所に散歩した時に、食物を受取る爲めに手袋を脱がうとして知らずに指環まで抜いてうつかり川の中へ落しました、此指環は私には國にも換へられない、私の心持は其方の察しに任せるとして、夫以來私は指

環を取り戻して呉れる人でなければ何人の使からも婚禮の話は聞かない事に極めました。此通りの事情であるから其方も好う考へて御覽、假令私の前で夜晝續けて二週間話をして私心は動かないンですよとすらくと淀みもなく断られて仕舞つた、内藏之助は驚いて仕舞いましたが、叮嚀に禮をして籠に入れた小さい犬と肩掛との贈物を受取られる様に願ひましたけれども、金髪美人は贈物は入らぬ、其心持は其方にも分らうと返事をしました、(三)

内藏之助は宿屋に歸つて、食事もせず直床へ這入りました、すると名をドルスと云ふ小さい犬も食事をしないで主人の床の傍へ寝ました、内藏之助は夜どほし「一月前に大きい河へ落ちた指環、如何したら見付からう、或は捜すのが愚かな事かも知れない、お姫様は何でも出来ない事を知つて居て云つたのかも知れない」と繰り返へして

は溜息を吐いて居ました、暫くして内藏之助は又如何にも情なさそうに溜息を吐いた、すると聞いて居たドルスは「御主人、好い運が向いて来るのですから失望なさいませぬ、貴君は幸と云ふよりも好すぎる程に思ふでしょう、明日の曉川岸へ私と一所に、私も屹度手傳ひをしますから」と云ひました、内藏之助は五月蠅く思つて打つ真似をして答へも仕ませんでしたが、心配し過ぎて何時かすやくと眠て仕舞ひました、(四)

夜の明けたのをドルスは知つて、直と吠へて主人を起し「サア、御主人、着物を着換へて出掛けましょう」と云ひますと、内藏之助も往つて見る氣になつて起き上り、仕度をして庭へ降り、庭から川岸の方へうかくとして行きました、内藏之助は帽子を目まで冠り腕組をして川に沿ふて歩きながら、唯自分の出立の時のことばかり考へて

居ますと、突然内藏之助さん〜と呼ぶ聲を聞きました、驚いて四邊を見廻はしましたたが誰も居りません、空耳であつたと思つて又歩き出すと『内藏之助さん〜』と呼ぶのが聞えます、『私を呼ぶのは誰だ』と内藏之助は大聲に云ひました、ドルスは小さいので水の際まで往つて見て居ながら、『慥に金の鯉ですよ』と答へました、と思ふと果して金の鯉が水の上に姿を出して『私は貴君のお蔭で牧場で死ぬ處を救けられました、而して今後貴君の爲めに死ぬと御約束をしたのです、サア内藏之助さん、茲に金髪美人の失した指環があります』と云ひました、内藏之助は屈んで鯉の口から指環を受取り幾度も〜禮を云ひました、(五)

内藏之助は宿へは歸らずに直ぐにお姫様のお屋敷へ自分の云ふ事を聞いて川岸へ主人の往つて呉れたのを喜で居るドルスを連れて往

きました、金髪姫は内藏之助が又お目見得を願ひ出たと聞いて『あゝ、可愛そうに暇乞に來たのだらう、多分私の云ふ事が出來ない事だと知つて歸つて主人に知らせる積りだらう』と云ひました、内藏之助はお姫様の前に案内された時に直ぐに指環を差出して『お取り下さい、御申付けの事は幸に仕遂げましたから、是で、貴女は私の主人を婿にして下さる事を私は信じます』と云ひました、金髪美人は指環が無事に舊の通りで戻つたのを見て驚きました、非常に驚いて夢ではないかと思ひました、『夢ではない、眞實に、コレ内藏之助、お前は神様にでもお願ひしたのであらう、左もなくては出來ない筈』と仰やると内藏之助は『お姫様、私は決して一人も神様にお近付は持ちません、唯、貴女の御命令には随ひ度いと骨を折りました』と云ひますと、『お、夫程にお前が親切ならば最一つ頼み度い事があります、茲から

左程遠くない處に梶原と云ふ公子があります、其人は是非私と結婚
したいと望んで来た人ですが、若私が承知しなければ怖ろしい復讐、
火と劔とで此國を滅ぼして仕舞ふと云つて来たのです、其人は塔の
様に脊の高い大男で、猿が果實を喰べる様に人を喰べるのですと云
つたら、私が其人と結婚の出来るか出来ないは考へても分りましょ
う、其上に外出する時には大砲を懐へ入れて短銃の代りにし、大き
い聲で話をすれば傍に居る人は聾になつて仕舞います、私は結婚は
仕ない積りで居たのですと云つてやつたのですから、許して呉れな
ければならないのに、私の領分の人民を慘酷に殺しては私を苦めて
居るのです、ですから何卒先づ此人と戦つて首を私に見せて下さつ
たらば何でも御言葉に従ふ事にしましょう」とお 様は熱心に話まし
した、(六)

内藏之助は今更の様に此申出には驚いて仕舞いました、少しの間
躊躇して居りましたが、『宜しい、私は梶原と戦ひましょう、屹度勝
つてお目に懸ける積りですが、私は死ぬかも知れませんが』と答へまし
た、金髪姫は少しも驚かずに言葉を盡して思ひ止まる様に内藏之助
に話しましたが、聞き入れないで此命懸けの仕事に入用の武器だの
其他を調へる爲めにお姫様の前を引下がりました、全く用意が出来
た時に内藏之助は又箱の中へドルスを入れ馬に乗つて出掛けました
が、間もなく梶原の領分へ着きました、途中で逢ふ人毎に尋ねて見
ました、何の人も何の人も同じ様に、梶原は悪魔で誰も決して傍へ
は近寄らないと答へました、此話を聞く度に流石の内藏之助も段々
に勇氣が無くなりました、けれどもドルスは『貴君が戦つて居る内に
私は梶原の脚に咬み付いてやります、屹度彼は放そうとして屈みま

すから其時に貴君は斬らなくてははいけませんよ』と勇み立つて居ます、
内藏之助は犬の頓智を褒めては居りますが、此助は十分には行くま
いと思つて居りました、(七)
暫くして梶原の城へ近く参りますと、道と云ふ道には梶原が引裂
いて殺したり喰つたりした、人の死骸や骨が其處ら中に落ちて居ま
す、内藏之助が是を見た時から間もなく、梶原が森の中を歩いて來
るのを見付けました、其次が森の中で一番高い樹よりも高いのです、
怖ろしい聲で歌ふのを聞きますと、
食事には好いのは赤兒の肉よ、
柔かいのは新らしいと若いと、
堅くも構はぬ齒は強いから、
二十手に入る夫れ迄は、

せめて少しは取つて置く、
内藏之助も負けずに同じ調子で歌ひました、
近く内藏之助に寄つて見よ、
鬼の手や齒で裂かれようものか、
體の大きさは叶はずとも、
強い奴だと思ふだろ、
到底も勝てぬと思ふだろ、(八)
梶原は此歌を聞いて方々を見廻はし、内藏之助が劔を抜いて梶原
を怒らせる様に二度三度馬鹿にした風をして見せたのを見付けた、
けれども夫は何の役にも立ちません、梶原は獨りで怒り出して若一
打喰つたらば内藏之助の體は粉微塵にならうと思はれる恐ろしく大
きい鐵の棒を手に取り上げました、此時に澤山の鳥が梶原の頭の上

へ飛んで来て眼を覗つてはつツ突きました、瞬く間に上手に兩眼ともつツ突き出したので血は兩頬に流れ出し梶原は何にも見へなくなつて仕舞ひました、内藏之助は梶原の旨うち振廻はす鐵の棒を避けながら、幾度も骨まで透れと突き刺したので血は體中から流れ出し遂に倒れて息は絶へました、内藏之助は其首を切り落し運の好かつたのに喜び勇んで是を持ちました、すると枝の鳥が「私は驚に殺され様とした時に貴君の仕て呉れた事を忘れません、如何かして恩返へしをするとお約束しましたが、今日私の仕た事で宜いかと思ひます」と云ひました、「鳥さん、お前方の親切は實に難有い、是で好いどこではない、私は永く恩に着ますよ」と内藏之助は禮を云く梶原の怖ろしい首を持つて馬に乗りました、(九)

(三三)

内藏之助が町へ着いた時に町中の人が隨いて来て「大胆な内藏之助君萬歳、梶原を退治て来た内藏之助君萬歳」と叫びました、お姫様は此騒を聞きまして内藏之助の死んだ知らせの来たのと心配したものですから其騒が何だか聞きもせず居ますと、内藏之助が氣味の悪い梶原の首を提げて来たのを見ました、「お姫様、貴女の敵は殺して参りました、是で最早貴女が私の主人の王様の言葉を御断はりにはならないだらうと思ひます」と内藏之助が云ひますと「あ、左様です、けれども私はお前が私の出立の前に暗闇の穴から水を取つて来て呉れなければ断はります、暗闇の穴と云ふのは茲からは左程に遠くない處に深さが十八里もある洞穴があつて入口には二匹の龍が居て何人をも通すまいと番をして居ます、若入口だけを通る事が出来ても中は非常な深い處を降りなければならず、中には蟾蜍や毒蛇

が澤山に居ます、夫を通り過ぎると小さい穴があつて、美と健康の泉が湧いて居ます、私は此水を少しでも是非取らなければならぬのです、其水の力は實に非常なもので美しい人が飲めば何時迄も美しく、若い人が飲めば何時迄も若く、醜い人が飲んでも美しくなり、年老つた人が飲んでも若くなる、内藏之助、私が此水を少しも持たずに此國を去る事が出来様か考へて下さい」と金髪の姫は云ました(一)「お姫様、貴女は其様に美しくお出なすつて其水がお入用はありませんでしよう、けれども私は不幸な使者で命は如何しても貴女に差上げなければならぬのですから、貴女の仰やる通り歸る事は到底出来ないうまでも往つて搜して参ります」と内藏之助は答へました、今度も金髪の姫は自分の望みを決して内藏之助に求めはしなかつたのですが、内藏之助は小さいドルスを連れて暗闇の穴へ美の泉を捜し

に出發しました、途中で逢ふ人が皆何と可愛そふな事ではないか、此様な美しい若者を殺しにやるとは、獨りで行くなら百度往つても水は取れない」と云ひました、内藏之助は是を聞きました、黙つてドン／＼と往きました、けれども非常に悲しそふに見へました、(二)やがて内藏之助は山の頂上へ着き少し休まうとして坐りました、馬は株を喰ひ、ドルスは蠅を追つて駆け廻つて居ました、暗闇の穴は茲から遠くはないと知つて居ましたから、内藏之助は若や見付かりはしまいかと方々見廻はしますと果して怖ろしい黒い岩から濃い煙の出で居るのを見付きました、すると今度は一匹の龍が口や眼からは火を吹き出して居るのを見へました、其體は青い様に黄ろく、其爪は怖ろしく大きく尾は百尋よりも長く巻いて居ます、ドルスも是を見付けました、恐れて仕舞つて何處へ匿れたら好いかと騒ぎ出しま

した、(三)

内藏之助は今死に時と用意をして、金髪姫から水を容れる爲めに渡された瓶を持つて山を下つて行きました、内藏之助は犬に向つて『是が私の最期だ、此瓶へ入れる水は龍が守つて居て到底も取る事は出来ないから、私が死んでから私の血を容れてお姫様に渡して呉れ而したらお姫様の強情が如何程に私の體に耐へたか、知れよう、夫から私の主人の王様に逢つて詳しくお話をして呉れ』と斯う云ひ放つて尙も下つて行かうとすると忽に『内藏之助さん』と云ふ聲が聞える、私を呼ぶのは誰だと云つて振り返へつて見ると古い木の洞穴の中に梟が居て内藏之助に向ひ『貴君は獵師の網から私を出して命を救けて下すつた、其時に恩返しをする』と約束をしましたが、今其時が来たのです、サア、瓶をお出しなさい、私は暗闇の穴の入口に居

内藏之助は今更の様に此申出には驚いて仕舞いました、少しの間躊躇して居りましたが、『宜しい、私は梶原と戦ひましょう、屹度勝つてお目に懸ける積りですが、私は死ぬかも知れません』と答へました、金髪姫は少しも驚かずに言葉を盡して思ひ止まる様に内藏之助に話しましたが、聞き入れないで此命懸けの仕事に入用の武器だの其他を調へる爲めにお姫様の前を引下がりました、全く用意が出来た時に内藏之助は又箱の中へドルスを入れ馬に乗つて出掛けました、間もなく梶原の領分へ着きました、途中で逢ふ人毎に尋ねて見ました、が何の人も何の人も同じ様に、梶原は悪魔で誰も決して傍へは近寄らないと答へました、此話を聞く度に流石の内藏之助も段々に勇氣が無くなりました、けれどもドルスは『貴君が戦つて居る内に私は梶原の脚に咬み付いてやります、屹度彼は放そうとして屈みま

すから其時に貴君は斬らなくてははいけませんよ」と勇み立つて居ます、内藏之助は犬の頓智を褒めては居りますが、此助は十分には行くま

いと思つて居りました、(七)

暫くして梶原の城へ近く参りますと、道と云ふ道には梶原が引裂

いて殺したり喰つたりした、人の死骸や骨が其處ら中に落ちて居ま

す、内藏之助が是を見た時から間もなく、梶原が森の中を歩いて來

るのを見付けました、其次が森の中で一番高い樹よりも高いのです、

怖ろしい聲で歌ふのを聞きますと、

食事には好いのは赤兒の肉よ、

柔かいのは新らしいと若いと、

堅くも構はぬ齒は強いから、

二十手に入る夫れ迄は、

せめて少しは取つて置く、

内藏之助も負けずに同じ調子で歌ひました、

近く内藏之助に寄つて見よ、

鬼の手や齒で裂かれようものか、

體の大きさは叶はずとても、

強い奴だと思ふだろ、

到底も勝てぬと思ふだろ、(八)

梶原は此歌を聞いて方々を見廻はし、内藏之助が劔を抜いて梶原

を怒らせる様に二度三度馬鹿にした風をして見せたのを見付けた、

けれども夫は何の役にも立ちません、梶原は獨りで怒り出して若一

打喰つたらば内藏之助の體は粉微塵にならうと思はれる恐ろしく大

さい鐵の棒を手に取り上げました、此時に澤山の鳥が梶原の頭の上

へ飛んで来て眼を覗つてはつツ突きました、瞬く間に上手に兩眼ともつツ突き出したので血は兩頬に流れ出し梶原は何にも見へなくなつて仕舞ひました、内藏之助は梶原の旨うち振廻はす鐵の棒を避けながら、幾度も骨まで透れと突き刺したので血は體中から流れ出し遂に倒れて息は絶へました、内藏之助は其首を切り落し運の好かつたのに喜び勇んで是を持ちました、すると枝の鳥が「私は驚に殺され様とした時に貴君の仕て呉れた事を忘れません、如何かして恩返へしをするとお約束しましたが、今日私の仕た事で宜いかと思ひます」と云ひました、「鳥さん、お前方の親切は實に難有い、是で好いどこではない、私は永く恩に着ますよ」と内藏之助は禮を云く梶原の怖ろしい首を持つて馬に乗りました、(九)

(三三)

内藏之助が町へ着いた時に町中の人が隨いて来て「大胆な内藏之助君萬歳、梶原を退治て来た内藏之助君萬歳」と叫びました、お姫様は此騒を聞きまして内藏之助の死んだ知らせの來たのかと心配したものですから其騒が何だか聞きもせず居ますと、内藏之助が氣味の悪い梶原の首を提げて來たのを見ました、「お姫様、貴女の敵は殺して参りました、是で最早貴女が私の主人の王様の言葉を御断はりにはならないだらうと思ひます」と内藏之助が云ひますと「あ、左様です、けれども私はお前が私の出立の前に暗闇の穴から水を取つて來て呉れなければ断はります、暗闇の穴と云ふのは茲からは左程に遠くない處に深さが十八里もある洞穴があつて入口には二匹の龍が居て何人をも通すまいと番をして居ます、若入口だけを通る事が出來ても中は非常な深い處を降りなければならず、中には蟾蜍や毒蛇

が澤山に居ます、夫を通り過ぎると小さい穴があつて、美と健康の泉が湧いて居ます、私は此水を少しでも是非取らなければならぬのです、其水の力は實に非常なもので美しい人が飲めば何時迄も美しく、若い人が飲めば何時迄も若く、醜い人が飲んでも美しくなり、年老つた人が飲んでも若くなる、内藏之助、私が此水を少しも持たずに此國を去る事が出来様か考へて下さい」と金髪の姫は云ました、「お姫様、貴女は其様に美しくお出なすつて其水がお入用はありませんでしよう、けれども私は不幸な使者で命は如何しても貴女に差上げなければならぬのですから、貴女の仰やる通り歸る事は到底出来ないますでも往つて捜して参ります」と内藏之助は答へました、今度も金髪の姫は自分の望みを決して内藏之助に求めはしなかつたのですが、内藏之助は小さいドルスを連れて暗闇の穴へ美の泉を捜し

に出發しました、途中で逢ふ人が皆「何と可愛そうな事ではないか、此様な美しい若者を殺しにやるとは、獨りで行くなら百度往つても水は取れない」と云ひました、内藏之助は是を聞きました、黙つてドン／＼と往きました、けれども非常に悲しそつに見へました、「こゝやがて内藏之助は山の頂上へ着き少し休まうとして坐りました、馬は株を喰ひ、ドルスは蠅を追つて駆け廻つて居ました、暗闇の穴は茲から遠くはないと知つて居ましたから、内藏之助は若や見付かりはしまいかと方々見廻はしますと果して怖ろしい黒い岩から濃い煙の出で居るのを見付きました、すると今度は一匹の龍が口や眼から火を吹き出して居のが見へました、其體は青い様に黄ろく、其爪は怖ろしく大きく尾は百尋よりも長く巻いて居ます、ドルスも是を見付けましたが恐れて仕舞つて何處へ匿れたら好いかと騒ぎ出しま

した、(三)

内藏之助は今死に時と用意をして、金髪姫から水を容れる爲めに渡された瓶を持って山を下つて行きました、内藏之助は犬に向つて『是が私の最期だ、此瓶へ入れる水は龍が守つて居て到底も取る事は出来ないから、私が死んでから私の血を容れてお姫様に渡して呉れ而したらお姫様の強情が如何程に私の體に耐へたかゞ知れよう、夫から私の主人の王様に逢つて詳しくお話をして呉れ』と斯う云ひ放つて尙も下つて行かうとするに忽に『内藏之助さん』と云ふ聲が聞える、私を呼ぶのは誰だと云つて振り返へつて見ると古い木の洞穴の中に梟が居て内藏之助に向ひ『貴君は獵師の網から私を出して命を救けて下すつた、其時に恩返へしをすると約束をしましたが、今其時が来たのです、サア、瓶をお出しなさい、私は暗闇の穴の入口に居

る者は皆知り合ですから』と云ひました、是を聞いて瓶を渡すと梟は何の妨もなく穴の中へ這入つて往つた、其時の内藏之助の喜びは如何なでしたらうか皆様の御察しに任せるより仕方はありません、一時間の四分の一ばかり経つと梟は瓶を持って歸つて來ました、瓶には一杯水が這入つて好く口がしめてあります、内藏之助は喜び極まつて心から梟に禮を云ひ又山を上つて喜んで町へ往く道を急いで行きました、(四)

内藏之助は直様お姫様のお屋敷へ出て瓶を金髮美人に差出しましたら、お姫様は驚いて何とも口が利けませんでした、やがて段々と内藏之助に禮を云ひ出發の用意を家來へ申渡しました、悉く仕度の出來ると共に内藏之助とお姫様とは一所に旅立ちました、處がお姫様は内藏之助が立派な若者であるばかりか實に勇氣のあるのに感服

して『其方が若し望むなら、此國を去らずに王となつて私と一所に残つたらば如何だ』と尋ねますと、『難有い思召、貴女の美しさは目の眩む程に思つて居りますが、私は主人に對しての約束に背いて其様な事は出来ません』と答へました、(五)

二人は忽に王様の都へ着き、王様は金髪美人の來た事を知りましたから途中まで迎へに出て世界中で最も美しい贈物をしました、婚禮の儀式は到底も口では話し盡されぬ程盛に行はれました、けれども金髪の美人は王様より内藏之助の方を豪いと思つて居ますから内藏之助が見へない時には安心が出来ない様な容子が見へ、其上絶へず内藏之助を褒めて居りました、『内藏之助の力でなければ私は茲へは來て居ません、内藏之助は私の爲めに到底も出来ない事を仕て呉れたのですから、貴君も何時迄も其恩を忘れずに置いてやつて下

さい、内藏之助が美の泉を汲で來て呉れたので、私も年を老らず何時迄も美しくつて居られるのです』と金髪美人は何時も王様に話して居りました、(六)

内藏之助の古い敵は妃の此言葉を漏れ聞いて王様に『陛下は御心好しで入らせらるが妃が絶えず内藏之助の事ばかり云つて居られ、外の使者では巧く行かなかつたにせよ内藏之助のお蔭と思へなど、陛下に恩に着せるのを御立腹にならんのは不思議です』と申し上げたものですから、王様も『實は私もお前の云ふ通りだと思つて居る、早速内藏之助に手械足械を付けて圓塔へ打ち込んで仕舞へ』と仰りました、内藏之助は捕へられ、王の爲めに色々骨折つた代りに又牢へ入れられて鎖で嚴重に繋がれました、内藏之助は誰にも逢ふ事は出来ません、唯牢番が時々少しの麵包を穴から投げ込んで呉れ土焼の壺に水

を少し注いで呉れるのを見るばかりでした、けれども小さい犬のド
ルスは決して主人を見棄てずに、毎日／＼の出来事を知らしては慰
めで居りました、(七)

金髪の妃は内藏之助の災難を聞くと直ぐ王様の膝に絶つて涙を流
して御許しを願ひせめては牢屋から出す丈でもと願ひましたが、言
葉を盡して願へば願ふ程王様は妃の心が内藏之助の事ばかりを思つ
て嘆願する様に考へて立腹しました、到底も聞かれないと思つて妃
も何も云はなくなり、唯悲しく情なく沈んで鬱いて居りました、(八)
王様は自分勝手に妃より自分が美しくないから色々の事が起ると
考へて美の水で顔を洗つて美しくなつて妃の心を取り直させ様と思
ひ立ちました、美の水は妃の寢室の化粧臺にある瓶の中にあつまし
た、妃が自分の目の前に置かなければならないと思つて置いたので

あります、或日侍婢が箒で蜘蛛を殺して居て過つて瓶を叩き落した
ので瓶は粉微塵に破れ水は残らず溢れて仕舞ひました、侍婢は慌て
破片を片付けましたが、如何したら好いか工風が付かず、やつと
王様の部屋にあるのが美の水の様な綺麗な水が這入て居て、其瓶が
自分が壊したのに似て居るのを思ひ出して、何とも云はずに夫を持
つて来て妃の部屋へ置きました、(九)

處が王様の部屋にあつた瓶の水と云ふのは或毒薬で、大名や宮中
の貴族が重い罪を犯した時に殺す爲めに用意してあるので、首を切
つたり絞め殺したりせず此水で顔を洗はせれば忽ち睡つて其儘死
んで仕舞ふ様にしてあるのです、夫だものですから毒とは知らずに
王様が或日の夕方妃の化粧臺へ来て其水で顔を幾度も／＼洗つた爲
め忽ちに睡りてけて遂に死んで仕舞ひました、小さいドルスが此事